

市之郷遺跡第13次発掘調査報告書

2019年3月

姫路市教育委員会

序

姫路市内には、約 1,200 か所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究や展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。このたび発掘調査を実施しました日出町三丁目の周辺は、弥生時代から中世にかけての市之郷遺跡をはじめ、市之郷廃寺などの主要遺跡が所在し、播磨地域の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。また、近年では JR 山陽本線の鉄道高架事業、阿保土地区画整理事業、キャストィ 21 などの周辺の再整備事業に伴い発掘調査が実施され、遺跡の実態が明らかとなってきました。このたびの調査では、特に古墳時代の歴史を復元する上で重要な成果を得ることができ、地域の歴史解明の一助になるものと考えております。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成 31 年（2019 年）3 月

姫路市教育委員会

教育長 松田克彦

一 例言

1. 本書は、兵庫県姫路市日出町三丁目地内で実施した市之郷遺跡(遺跡番号:020462)の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査(調査番号:20150237)は、姫路市建設局道路建設部道路建設課が施工する市道城東146号線整備工事に先立ち、平成27年度に同課より依頼を受け、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。
3. 整理作業、報告書の編集は、平成28年度から平成30年度に姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。

調査及び整理の体制は下記のとおりである。

姫路市教育委員会 平成30年度現在 ()内は、調査開始から平成29年度までに在籍した職員

教育長 松田克彦 (中杉隆夫)

教育次長 名村哲哉 (八木優、林尚秀)

生涯学習部

部長 岡田俊勝 (植原正則、小林直樹)

文化財課

課長 花幡和宏 (福永明彦)

課長補佐 大谷輝彦

技師 黒田 祐介

埋蔵文化財センター

館長 前田光則 (秋枝芳)

課長補佐 岡崎政俊

係長 森恒裕

主事 (岡本武平、小林啓佑)

技術主任 小柴治子(調査・整理担当)、中川猛、福井優、南憲和、関梓

技師補 山下大輝

4. 遺物実測図作成及びトレースは株式会社地域文化財研究所、遺構実測図トレース及び版下作成は、株式会社イソノクに委託した。空中写真測量図作成は、株式会社オーシスマップに委託した。
5. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。
6. 発掘調査・出土品整理及び報告書の作成にあたっては、地元自治会より御協力を賜った。また、兵庫県立大学大学院滅災復興政策研究科教授 森永速男氏にご協力をいただくとともに玉稿を賜り、本書第三章に収録した。深く感謝の意を表したい。

一 凡例

1. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海面(T.P.)を基準とした。
2. 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
3. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
ピット→SP 土坑→SK 溝→SD 堅穴建物跡→SI 掘立柱建物跡→SB、SK1～3は攪乱だったことが判明したため欠番

—目次—

序 / 例言・凡例 / 目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査地の位置

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査地の位置と周辺の遺跡	1
3. 既往調査	1

第Ⅱ章 調査の成果

1. 調査区の基本層序	3
2. 弥生時代	3
3. 古墳時代	3
4. 奈良時代～平安時代	5
5. 平安時代末～室町時代	5

第Ⅲ章 考察

市之郷遺跡で検出された焼土 (S13・S15) の考古地磁気年代	6
----------------------------------	---

第Ⅳ章 総括

総括	9
----	---

—挿図・挿表目次—

挿図1 焼土 (S13及びS15)それぞれで採取した土壌試料の、交流消磁後の残留磁化方向(●)及び平均方向(★)	7
挿図2 焼土範囲 (S13及びS15)の平均方向と考古地磁気の標準曲線との対比	8
挿表1 焼土範囲 (S13及びS15)で採取した土壌試料の残留磁化(強度・方向)とその平均値調査地遠景	8
挿表2 市之郷遺跡 古墳時代中期～後期の遺構変遷表	9

—図版目次—

図版1 図1 調査の位置と周辺の遺跡	図版14 図15 S16 詳細図
図版2 図2 市之郷遺跡の既往調査箇所位置図	図版15 図16 SK7 詳細図
図版3 図3 調査区全体図(上層)	図版16 図17 SD7 遺物出土状況詳細図
図版4 図4 調査区全体図(下層)	図版18 図18 SD・SK 断面図及び詳細図(下層)
図版5 図5 調査区南壁断面図	図版19 図19 SK 断面図(上層)
図版6 図6 S11 詳細図1	図版17 図20 出土遺物実測図1
図版7 図7 S11 詳細図2	図版18 図21 出土遺物実測図2
図版8 図8 S12 詳細図1	図版19 図22 出土遺物実測図3
図版9 図9 S12 詳細図2	図版20 図23 出土遺物実測図4
図版10 図10 S13 詳細図1	図版21 表1 出土遺物観察表1
図版11 図11 S13 詳細図2	図版22 表2 出土遺物観察表2
図版12 図12 S14 詳細図1	図版23 表3 出土遺物観察表3
図版13 図13 S14 詳細図2	図版24 表4 出土遺物観察表4
図版14 図14 S15 詳細図	

—写真図版目次—

写真図版1 写真1 調査地遠景(南から) / 写真2 調査地遠景(北から) ※写真1,2は阿保土地区画整理事業に伴う発掘調査で撮影した
写真図版2 写真3 調査区と建造中のJR東姫路駅(東から) / 写真4 調査区全景(真上から)
写真図版3 写真5 調査区全景(西から)
写真図版4 写真6 S11 炭化材検出状況(南から) / 写真7 S11 床面検出状況(南から)
写真図版5 写真8 S11 完掘状況(南から) / 写真9 S11 断面(北から) / 写真10 S11 土器№1,2出土状況(東から)
写真11 S11 土器№3出土状況(西から)
写真図版6 写真12 S12 床面検出状況(南東から) / 写真13 S12 かまど(南東から) / 写真14 S12 かまど周辺遺物出土状況(北から)
写真15 S12 周溝検出状況(南東から) / 写真16 S12 完掘状況(南東から)
写真図版7 写真17 S13(西から) / 写真18 S13 完掘状況(西から) / 写真19 S13かまど 遺物出土状況(南から)
写真20 S13かまど 完掘状況(南西から) / 写真21 S13かまど サンプル採取状況(北西から)
写真図版8 写真22 S14(西から) / 写真23 S14かまど周辺 土器№1出土状況(西から) / 写真24 S14 土器№2出土状況(東から)
写真25 S14 かまど周辺 床面検出状況(西から) / 写真26 S14 かまど完掘状況(北東から)
写真図版9 写真27 S15(東から) / 写真28 S15かまど 土器№1出土状況(東から) / 写真29 S15 完掘状況(西から)
写真30 S15 サンプル採取状況(北から) / 写真31 S15 サンプル採取状況(南から)
写真図版10 写真32 S16(北東から) / 写真33 S16 かまど検出状況(北から) / 写真34 S16かまど 遺物出土状況(北から)
写真35 S16 土器№1出土状況(東から) / 写真36 S16 土器№2出土状況(東から)
写真図版11 写真37 SK7(南西から) / 写真38 SK7 断面(西から) / 写真39 SK7 土器№1出土状況(西から) / 写真40 SK7 土器№2出土状況(北から)
写真図版12 写真41 SK4(南から) / 写真42 SK5(南から) / 写真43 SK8(南から) / 写真44 SK9(南から) / 写真45 SK10(南から)
写真46 SK11(西から) / 写真47 SK17 土器№1出土状況(東から) / 写真48 SK18 土器№1出土状況(南から)
写真図版13 写真49 SD7(南から) / 写真50 SD7 土器№1～6出土状況(北から) / 写真51 SD7 土器№6出土状況(西から)
写真52 SD7 土器№7出土状況(北から) / 写真53 SD7 断面(北から)
写真図版14 写真54 SD4(南から) / 写真55 SD5(北から) / 写真56 SD6(西から) / 写真57 SD8(南西から)
写真図版15 写真58 SB1(南から) / 写真59 SB2(南から)
写真図版16 写真60 出土遺物1
写真図版17 写真61 出土遺物2
写真図版18 写真62 出土遺物3

第1章 調査に至る経緯と調査地の位置

1. 調査に至る経緯

姫路市日出町三丁目において、JR 東姫路駅建設事業に伴い、市道城東 146 号線整備工事が計画された。当該地は市之郷遺跡（県道跡番号 020462）の範囲内に所在する（図 1）。また、兵庫県教育委員会が J R 山陽本線等連続立体交差事業に先立ち実施した兵庫県第 1 次発掘調査における、E-3～5 区区の北側に位置し、県営姫路日出住宅の建設に先立つ兵庫県第 3 次発掘調査箇所及び、平成 28 年（2016 年）に実施した姫路市 16 次調査箇所の南側に位置する。これらの既往調査により、弥生時代～古墳時代を中心とする遺構の存在が想定されたことから、遺構の保存状況を把握するため、確認調査を実施することとなった。

平成 26 年（2014 年）8 月 2 日に 2m×2m の試掘坪を 3 箇所、工事予定地内に設定し、確認調査（調査番号：20140214）を実施した。その結果、すべての調査区で遺構埋土と見られる堆積層を確認した。特に 3 区では基盤層上面に被熱により赤く変色した状況が観察されたことから、堅穴建物跡の存在が想定された。このように、遺構が良好に保存されていることが判明したことから、工事範囲 593 m²を対象とし、本発掘調査を実施することとなった（図 2）。調査期間は、平成 27 年（2015 年）7 月 28 日から 11 月 16 日で、市之郷遺跡において姫路市が実施した発掘調査としては第 13 次調査にあたる（調査番号：20150237）。

2. 調査地の位置と周辺の遺跡

市之郷遺跡は、弥生時代から中世にかけて営まれた集落遺跡である。包蔵地の範囲は、JR 東姫路駅周辺の姫路市日出町、市之郷、市之郷町、阿保にまたがる東西約 1km、南北約 350m を測り、遺跡の東端は、現在の市川西岸に達する（図 1）。遺跡の中央付近に 7 世紀半ばの創建とされる市之郷廃寺（県道跡番号：020463）がある。周辺の遺跡としては、南に阿保遺跡第 1 地点・第 2 地点が所在する。前者からは初期須恵器や韓式系土器がみつかり、近年には縄文土器も出土した。後者では弥生時代の堅穴建物跡や中世の掘立柱建物跡、木棺墓が確認され、跡脚礎や石帯等の奈良時代から平安時代の官衙に関連するとみられる遺物も出土している。約 1km 西方には播磨国府推定地である本町遺跡やその関連施設跡とされる豆腐町遺跡が所在する。市川東岸には市内最大の前方後円墳である国指定史跡壇場山古墳や豊富な渡来系副葬品が国指定重要文化財となっている宮山古墳をはじめ、古墳時代中期から後期を中心とする多くの古墳が築造されている。

3. 既往調査

当該地周辺は、戦前から遺物の表採や塔心礎の存在などが知られ、研究者の注目を集めてきた。

昭和 16 年（1941 年）には姫路貨物駅操車場拡張工事によって多くの弥生土器が出土した。その際、遺物の採集がなされており、今里幾次氏によって報告されている（今里 1962）。昭和 45 年（1970 年）には、鎌木義昌氏が山陽新幹線建設に伴う事前調査を実施された。この調査は、調査地点等の詳細は不明であるものの、弥生時代中期の堅穴建物跡や奈良時代の掘立柱建物跡が検出された（鎌木 1971）。近年は、姫路駅周辺の山陽本線等連続立体交差事業と、それに伴い発生した用地を活用した都市計画「キャスティ 21 計画」のサブエリア（生活利便ゾーン、健康福祉・住宅ゾーン）及び、姫路駅周辺土地区画整理事業地にも該当していることから、兵庫県警姫路警察署やものづくり大学校、すこやかセンターなどの施設、大日線などの道路整備等の再開発事業に伴い、平成 6 年から遺跡の本格的な調査が開始された。平成 29 年度までには姫路市では 18 次、兵庫県では 5 次におわたる本発掘調査がおこなわれている。なお、姫路市による試掘・確認調査に基づき、当初の遺跡名は「仮称 姫路駅周辺第 3 地点遺跡」であったが、平成 22 年（2010 年）5 月 26 日をもって「市之郷遺跡」に変更された。

今回報告する姫路市第 13 次調査と特に関連するのは、兵庫県第 1 次調査、第 5 次調査および、姫路市第 14 次、16 次、18 次調査である（図 2）。これらの調査でも、同じく 5 世紀から 6 世紀の堅穴建物跡を検出し、渡来人集団の集落域の北側への広がりを確認した。以下に既往調査の概要を述べる。

〈兵庫県教育委員会〉

- 第 1 次調査 J R 山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査である。弥生時代から中世の遺構を検出した。なかでも、最も東端の調査区である E 区において造付のかまどを持つ堅穴建物跡から初期須恵器と韓式系土器が出土したことで渡来人集落の存在が明らかとなった。また、調査区西部が市之郷廃寺の想定地に当たり、東西方向の溝から瓦が大量に出土したことから、市之郷廃寺の寺域を区画する遺構の可能性が想定され、寺の実態解明の糸口となった。
- 第 2 次調査 都市計画道路大日線緊急街路整備工事に伴う発掘調査である。弥生時代前期から中期の集落跡を確認し、前期の土坑から炭化米がまとまって出土した。
- 第 3 次調査 県営姫路日出住宅建替に伴う発掘調査である。弥生時代中期から後期、古墳時代前期、後期の堅穴建物跡と掘立柱建物跡を中心とする遺構を検出した。中でも、古墳時代前期（布留式併行期）の大型の掘立柱建物跡と、古墳時代後期の堅穴建物跡群から掘立柱建物跡群への推移の状況を確認した。
- 第 4 次調査 姫路警察署庁舎新築事業に伴う発掘調査である。弥生時代、古墳時代、中世の遺構を検出した。なかでも、古墳時代の遺構は、6 世紀後半から 7 世紀中頃にかけての堅穴建物跡と掘立柱建物跡群を

検出し、7世紀前半の掘立柱建物群は、調査区の東に近接して所在する市之郷廃寺建立に関わった氏寺建立氏族の居宅跡であると推測されている。

- 第5次調査 ものづくり大学校整備事業に伴う発掘調査である。弥生時代前期の土坑、中期の竪穴建物跡、土坑、溝、古墳時代の竪穴建物跡、溝、土坑、中世の掘立柱建物跡、墓、井戸、梵鐘の鋳造遺構及び、市之郷廃寺の寺域の中心部を検出した。古墳時代の竪穴建物跡は、27棟のうち4棟から韓式系土器が出土し、溝や土坑から鉄滓が出土している。市之郷廃寺関連の遺構は、初めて中心伽藍を検出し、金堂と考えられる基礎跡、築地跡を確認し、蘭尾、道具瓦を含む大量の瓦と共に水煙の一部が出土したことから、塔跡の存在が想定されている。

〈姫路市教育委員会〉

- 第1次～
第3次調査 姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査である。平成6年度から平成9年度に実施した。都市計画道路大日線より西側の調査区では、弥生時代中期から古墳時代初頭の溝、竪穴建物跡、土坑、掘立柱建物跡などが確認されている。また、奈良時代の祭祀に関連するとみられる遺構を検出した。東部調査区では、古墳時代の竪穴建物跡、溝、土坑、市之郷廃寺に関連するとみられる瓦、蘭尾が出土している。
- 第4次調査 キャスティ21住宅建設に伴う発掘調査である。弥生時代の流路、平安時代後期以降の掘立柱建物跡5棟などを検出し、これらの遺構を検出した土層から、突帯文土器が出土している。
- 第5次調査 新福祉センター建設に伴う発掘調査である。弥生時代から中世の遺構を確認した。調査区中央で旧河道を検出し、弥生時代から古代の遺構はそれを避けるように東西の微高地から検出された。このうち、調査区東部で検出した南北方向の溝は、周辺の兵庫県教育委員会の調査成果と合わせて市之郷廃寺の寺域の西限を区画する溝の一部と評価されており、この溝の東西に隣接して同時期の掘立柱建物跡が検出されている。中世の遺構としては、13世紀頃の底に木枠を据えた石組み井戸、木棺墓、火葬墓と見られる土坑墓などを確認した。
- 第6次調査 店舗建設に伴う発掘調査である。弥生時代中期の溝、古墳時代後期末から奈良時代の東西方向の溝、土坑、平安時代の遺構を検出した。溝は市之郷廃寺に関連する遺構とみられ、埋土から窯体や鉄滓等が出土している。
- 第7次調査 すこやかセンター（旧名：新福祉センター）全天候型福祉スポーツ施設建設に伴う発掘調査である。弥生時代中期以前の流路、古墳時代の造付かまど付の竪穴建物跡、市之郷廃寺に関連する可能性がある掘立柱建物跡、溝などを検出した。
- 第8次調査 店舗建設に伴う発掘調査である。調査範囲の大部分は旧河道にあたり、古代以前の遺構は確認できなかった。調査区南西隅で、旧河道の東岸を検出し、それより南東側でわずかに弥生時代前期、中期の土坑や溝を検出した。
- 第9次～
第10次調査 阿保土地区画整理事業地内における、都市計画道路大日線整備に伴う発掘調査である。中世の柱穴を多数検出し、土坑墓なども確認した。
- 第11次調査 JR東姫路駅駅前広場整備に伴う発掘調査である。古墳時代の土坑、奈良時代の溝、土坑、中世の掘立柱建物跡、柱穴、土坑を確認した。
- 第12次調査 JR東姫路駅駅舎建設に伴う発掘調査である。弥生時代の溝、平安時代のピットを確認した。姫路市埋蔵文化財センター報告書第34集として報告書が発刊されている。
- 第13次調査 本報告書の調査
- 第14次調査 水路付け替え工事に伴う発掘調査である。弥生時代後期の竪穴建物跡、旧河道、古墳時代中期の竪穴建物跡、溝、奈良時代の溝、中世の土坑、柱跡を検出した。
- 第15次調査 市道146号線（南北方向拡張）に伴う発掘調査である。ピットを検出したが、中世以前の明確な遺構は確認できず、遺跡の縁辺部にあたとみられる。
- 第16次調査 店舗建設に伴う発掘調査である。弥生時代の竪穴建物跡、土坑、溝、方形周溝墓、古墳時代の竪穴建物跡、土坑、溝、掘立柱建物跡、柱穴、中世の土坑、溝、柱穴等を検出した。当該地は、第13次調査と同じく兵庫県教育委員会による第1次調査で古墳時代中期の竪穴建物をまとまって確認したE地点の北側にあたり、渡来人集落の分布について新たな情報が追加された。姫路市埋蔵文化財センター報告書第59集として報告書が発刊されている。
- 第17次調査 集合住宅建設に伴う発掘調査である。弥生時代の溝、竪穴建物跡、古墳時代の竪穴建物跡、中世の溝、土坑、掘立柱建物跡を検出した。姫路市埋蔵文化財センター報告書第60集として報告書が発刊されている。
- 第18次調査 集合住宅建設に伴う発掘調査である。弥生時代の竪穴建物跡、土坑、溝、古墳時代の竪穴建物跡、土坑、溝、柱穴、中世の掘立柱建物跡、溝、柱穴等を検出した。当該地は、第13次調査と同じく兵庫県教育委員会第1次調査で古墳時代中期の竪穴建物跡がまとまって検出されたE地点の北側にあたり、渡来人集落の分布について新たな情報が追加された。

第II章 調査の成果

1. 調査区の基本層序

現地表面から盛土、旧耕土、床土、部分的に中世の遺構埋土と同じ灰色シルト混じり砂質土、古墳時代末から奈良時代の遺物を少量含むオリーブ色粗砂混じり砂質土、及び古墳時代後期以前の遺物を含む暗灰褐色粘質土を経た約1m～1.5m下で、遺構検出面である黄灰色砂礫層または黄灰色砂混じり粘質土層を確認した。検出レベルは、調査区の北東側が高く、T.P. 12.1mで、遺構検出面は砂礫である。この砂礫層は南西に向けて標高が下がっており、SK7の東付近で黄灰色砂混じり粘質土層の下に埋没していく。ここから西の遺構検出面は、やや低く、T.P. 11.8～11.9mである。調査区中央部のS11からS14の間はT.P. が11.7mとさらに1段低くなる。

検出した遺構は、弥生時代の遺物を含む旧河道、古墳時代の堅穴建物跡、土坑、溝、奈良～平安時代とみられる溝状遺構、中世の土坑、溝、柱穴などである。以下、時代ごとに主要遺構の詳細を述べる。なお、詳細図がある遺構は、図もしくは図版番号を示すが、それ以外の遺構はすべて図3、図4に掲載している。

2. 弥生時代

明確に人為的な遺構は確認できなかったが、SK7の下層より弥生時代中期を中心とする遺物が出土した(図20-1～4)。このほか、SD7、S11周辺の断割り、攪乱断面の清掃においても弥生土器が出土している。S11周辺の断割りで確認した古墳時代以降の遺構検出面である弥生土器の包含層(黄灰色砂混じり粘質土層)は、東から西に向って堆積が薄くなり、SD4の東側で消失していた。平成29年度に南隣の区画で実施した第19次調査で、SD4からS11付近の南側で河道を検出し、分銅土製品などが出土していることから、当該地は、調査区北東部の遺構検出面である砂礫層から調査区西部のSD4の東付近までが、何らかの流路を変化させたながら弥生時代中期頃までに埋没した旧河道にあたるものとみられる。また、SD7付近の断割りでは、検出面から20cmほどの深さで弥生時代後期の遺物が出土していることから、この河道が完全に埋没して安定したのは、弥生時代後期以降と推測される。SD4以西も近似した黄灰色粘質土層が遺構検出面であるものの、北隣で実施した第16次調査において弥生時代中期初頭(II期)の遺構を検出していることから、北側の砂礫層から続く落ちの堆積層であるが、堆積時期が異なっているものとみられる。

3. 古墳時代

堅穴建物跡6棟(SI1～6)、土坑14基(SK7～21(SK15はS15に変更したため欠番))、溝3条(SD5,6,7)を検出した。堅穴建物跡

SI1 調査区中央付近南端で建物の北側約1/2を検出した。東西5.0m、南北は最大で2.8mで方形を呈するが、遺構の南部が調査区外に延びるため全体の規模は不明である。既存構造物より西側の一部が攪乱を受けている。(図6.7)。検出レベルはT.P. 11.75m、床面レベルはT.P. 11.3mで、建物の主軸は、N-27°Eである。床面直上より多量の炭化材が出土したことから、焼失したものとみられる。燃焼施設は不明であるが、周溝の東辺が他辺より一段深し、北東角に長径1.2m、短径0.8m、深さ0.2mの土坑の窪みを確認したことから、この部分がかまどの痕跡である可能性が高いと推測する。この窪みの埋土より土器器蓋の口縁部と底部が出土した(図20-7.8)。また、床面中央北側で須恵器無蓋高杯と壺が出土した(図20-6.9)。高杯は、脚部が欠損しているが、杯部はほぼ方形である。外面下部に波状文を巡らせ、退化した把手が1箇所ついている。壺は、頸部に2条の波状文を巡らし、体部は完全に欠損している。両者は床面直上で正位置で出土したことから、人為的に置かれた可能性が推察される。須恵器の形状から、陶邑田辺編年TK216～208型式に併行する年代が推察される。

SI2 建物の北側約1/2を検出した。東西6.4m、南北4.2m以上で、方形を呈するが、遺構の南部が調査区外に延びるため全体の規模は不明である(図8.9)。深さは、0.2mを測り、検出レベルはT.P. 11.9m、床面レベルはT.P. 11.7mで、建物の主軸は、N-43°Wである。北西辺中央付近で造付けのかまどを検出した。燃焼部の平面形は半形で、最大幅0.55m、長さ1.2m、壁の厚みは基底部の残存厚が0.2～0.3mを測る。主柱穴は南東角以外の3基を確認した。このほか、建物外縁に沿って幅0.75～0.8m、深さ約0.1mを測る周溝を検出した。かまどが据えられた北西辺は溝が一段深く掘削されており、深さ0.25mを測る。北西辺の周溝はかまどの下にも続いており、一旦溝を掘り下げてからかまどを構築したことが判明した。また、かまどの外壁以外の埋土も建物全体のそれとは異質であったことから、北西壁の周溝上部は、テラス状に床面より1段高くなっていった可能性が想定できる。同様の構造を持つ堅穴建物跡が、第16次調査でも1棟確認されている(第16次調査S18)。出土遺物は、土器器小壺型、杯、高杯、把手(壺の可能性が高い)、壺、甌である(図20-10～16)。このほか、製塩土器とみられる破片が1点出土している。厚さが1～2mmと薄く、手づねで整形した円筒状の形状が想定できる素焼きの土製品である。外面はナデ調整で、タキ等の痕跡はみられない。時期は、陶邑田辺編年TK208～TK47型式に併行する年代が推察される。

SI3 下水及び水道管の攪乱により、遺構が分断されているものの、建物の2/3程度を検出した。東西4.2m、南北2.6m以上で、深さ0.25mを測る(図10.11)。検出レベルはT.P. 11.8m、床面レベルはT.P. 11.6～11.55mで、建物の主軸は、N-10°Eである。北西中央で造付けのかまどを検出した。燃焼部の平面形は半形で、燃焼部最大幅0.74m、残存長は0.76m、壁の厚みは基底部の最大残存厚が0.17mを測る。かまど中央に支柱とみられる川原石を据えていた。主柱穴は北辺の1基を確認した。この柱穴から他の主柱穴の位置を推測すると、全て攪乱の範囲に入ることから、検出した1基以外は攪乱を受けている可能性が高い。このほか、建物東辺、西辺に沿って幅0.6～0.95m、深さ約0.1～0.2mを測る周溝を検出した。西辺の周溝はかまどの脇まで掘

り下げられているが、かまどの下には続いていた。出土遺物は、土師器壺、杯、高杯、把手付甕、甕、甕などで、土師器の外面調整は全てハケメである(図20-17～19)。時期は、陶邑田辺編年TK208～TK47型式に併行する年代が推察される。

- SI4 調査区東部北端で、下水及び水道管の擾乱により、遺構が分断されているものの、建物のほぼ全体を検出した。北側がわずかに調査区外に延びているが、東西3.6m、南北4.95mの長方形を呈する。(図12,13)。深さ0.25mを測り、検出レベルはT.P.11.8m、床面レベルはT.P.11.5～11.55mで、建物の主軸は、N-5°-Eである。東辺北端で検出されたかまどを検出した。燃焼部と見られる位置の上部で焼土、炭化物が大量に出土したが、かまどの外壁は断削りの断面観察でも検出できなかった。かまど基底部の平面プランは、不整形な楕円を呈し、床面から0.1m程度掘り込まれていた。掘込みの中央付近に支柱とみられる川原石を据えていた。主柱穴は建物中央で2基を確認した。SI4では、明確な周溝は検出されなかった。出土遺物は、須恵器壺、杯身、高杯、甕、土師器甕などで、土師器の外面調整は全てハケメである(図21-20～26)。時期は、陶邑田辺編年OM46～TK208型式に併行する年代が推察される。
- SI5 調査区中央西寄りで、下水及び水道管の擾乱により、遺構が分断されているものの、建物のほぼ全体を検出した。東西5.2m、南北4.1mの長方形を呈する(図14)。深さ0.25mを測り、検出レベルはT.P.11.7m、床面レベルはT.P.11.5mで、建物の主軸は、N-10°-Eである。東辺北端でかまどの痕跡を検出した。燃焼部と見られる位置で焼土、炭化物が大量に出土したが、かまどの外壁は断面観察でも検出できず、焼土塊の科学的分析の結果が示す年代と遺物の編年観が大きく異なっていることから、焼土は原位置を保っていない可能性が高い。このほか、建物東辺北側のプランが突出している部分で、床面下層より周溝とみられる溝状のプランを検出した。幅0.95m、延長2.6m、深さ約0.1mを測る。他辺では周溝は検出されなかった。主柱穴は建物南側で2基を確認した。検出位置からSI5の主柱穴は4基と推測されるが、想定位置には下水管が設置されており、北側の主柱穴は擾乱を受けている可能性が高い。出土遺物は、須恵器壺、須恵器杯身、土師器高杯、甕(図21-27～30)などである。土師器高杯は、杯部の口径が30cm近くを測る大型の器種である。時期は、陶邑田辺編年OM46～TK208型式に併行する年代が推察される。
- SI6 調査区中央で、水道管の擾乱により遺構が分断され、SD7より中央が擾乱を受けているものの、建物のほぼ全体を検出した。東西3.5m、南北3.5mの方形を呈する(図15)。深さ0.25mを測り、検出レベルはT.P.11.65m、床面レベルはT.P.11.4mで、建物の主軸は、N-41°-Eである。北東辺中央北寄りがかまどの痕跡を検出した。燃焼部とみられる位置に土器片、焼土塊の集積が見られ、支柱とみられる川原石を検出したが、かまどの外壁は断面観察でも検出できなかった。出土遺物は、須恵器甕、土師器小型丸底壺、韓式系軟質土器甕である(図21-31～34)。韓式系軟質土器甕は、かまどから出土した。体部の破片のみで、器種の詳細は不明であるが、外面が格子タタキで調整されている。須恵器甕(図21-31)は、遺構東辺の床面から口縁の内側に小型丸底壺の1つ(図21-33)が置かれた状態で出土した。口縁から頸部は完形で、口縁部を薄く、丸く収め、頸部は短く頸部直下から体部は欠損している。時期は、陶邑窯跡群ON231に併行する年代が推察される。

土坑

- SK7 調査区東部南端で、東西8.5m、南北5.5mの不整形な半円形のプランを検出した(図16)。南側が調査区外に延びているが、ほぼ全体の規模は不明である。深さ0.7～0.8mで、断面形状は中央に向ってなだらかに下がる。しかし、遺構検出面から深さ約40cmまでの上層は暗灰褐色粘質土が堆積し、遺物も古墳時代の須恵器などが出土するのに対し(図21-35～39)、下層は砂礫混じりの粘質土に変化しており、遺物も弥生時代中期のものである(図20-1～4)。このほか、上層埋土からは炭化材と焼土塊が1ヶ所に集中して出土している。これらの状況から、SK7の上層は不安定な環境と土質により原形が崩壊しているものの、古墳時代の堅穴建物跡である可能性が高いと推察される。時期は、2層目の底面より出土した須恵器杯身、土師器甕など(図21-36,38,39)から、陶邑田辺編年OM46～TK47型式に併行する年代が推察される。
- SK8 直径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土から古墳時代の遺構とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である(図18)。
- SK9 直径0.82m、深さ0.25mを測る。埋土から古墳時代の遺構とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である(図18)。
- SK10 直径0.7m、深さ0.15mを測る。埋土から古墳時代の遺構とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である(図18)。
- SK11 直径0.45m、深さ0.15mを測る。埋土から古墳時代の遺構とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である(図18)。
- SK12 1.3×2.3mの不整形な楕円形を呈する。埋土から古墳時代の遺構とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。人為的な遺構ではなく、周辺の遺構検出層である旧河道上面の遺物や土砂が2次的に堆積した落ちである可能性もある。
- SK13 1.3×2.3mの不整形な楕円形を呈する。埋土から古墳時代とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。SK12と同じく、人為的な遺構ではない可能性もある。
- SK14 2.1×0.8mの不整形な長楕円形を呈する。埋土から古墳時代とみられるが、遺物細片のため詳細は不明である。SK12と同じく、人為的な遺構ではない可能性もある。
- SK16 調査区北西部で確認した。南側は擾乱を受け、1.1×1.1mの半円形で、深さは0.45mである(図18)。埋土上層より土師器甕が出土した(図21-40)。
- SK17 直径0.4mの円形で、深さは0.55mを測る(図18)。埋土上層より須恵器甕の口縁部が出土した(図21-42)。時期は、陶邑田辺編年TK73型式に併行する年代が推察される。
- SK18 0.7×0.47mの楕円形で、深さは0.4mを測る(図18)。埋土上層より土師器甕が出土した(図21-41)。

の主軸は、 $N-10^{\circ}-E$ である。

- SK19 $0.55 \times 0.3m$ の楕円形で深さ $0.17m$ を測る。埋土から古墳時代とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。SK12と同じく、人為的な遺構ではない可能性もある。
- SK20 $0.8 \times 0.55m$ の楕円形を呈する。埋土から古墳時代とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。周辺の遺構検出層である旧河道上面の遺物や土砂が2次的に堆積した包含層である可能性もある。
- SK21 $3.3 \times 1.0m$ の長方形で、深さは $0.4m$ を測る。埋土から古墳時代とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。
- SK22 $0.95 \times 0.7m$ の楕円形を呈する。埋土から古墳時代とみられるが、遺物細片のため詳細は不明である。SK12と同じく、周辺の遺構検出層である旧河道上面の遺物や土砂が2次的に堆積した包含層である可能性もある。

溝

- SD5 幅 $0.4 \sim 0.7m$ 、深さ $0.05m$ 、延長 $5.25m$ で、北端が攪乱を受けていた(図18)。埋土から古墳時代とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。
- SD6 幅 $0.5 \sim 0.75m$ 、深さ $0.05m$ 、延長 $3m$ で、東西端が攪乱を受けていた(図18)。埋土から古墳時代とみられるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。
- SD7 幅 $0.9 \sim 1.3m$ 、延長 $11m$ での範囲を確認した。調査区を縦断し、南北に続く。深さは最大で $0.4m$ を測る。S14、S16の上面で検出した。断面図の2層上面付近で、土器の集積を2ヶ所確認した(図17)。このうち、南側の土器群では、土師器の甕、埴、壺、須恵器のハソウが出土し(図22-59～64)、北側の土器群からは、須恵器甕の体部が出土した(図23-65)。時期は、陶邑田辺福年TK43～209型式に併行する年代が推察される。

4. 奈良時代～平安時代

この時期の明確な遺構は溝1条(SD8)のみである。(断面は図14 S15断面図a-a'に掲載)

- SD8 幅 $20cm$ 、深さ $10 \sim 15cm$ を測り、検出した範囲の延長は m 、不規則な間隔ではあるが、溝の中から直径 $10 \sim 15cm$ の柱穴を検出していることから、櫓などの区画施設である可能性が推測される。この遺構は平成26年度に当該地の南西で実施した第12次調査で検出した遺構の続きにあると推測している。遺物はほぼ出土しておらず、遺構の時期は不明瞭であるが、第12次調査成果からこの時期の可能性を想定している。

5. 平安時代末～室町時代

土坑3基(SK4～6)、溝4条(SD1～4)及び掘立柱建物跡2基、柱穴30基を確認した。

土坑

- SK4 直径 $1.1m$ の円形で、深さ $0.05m$ を測る(図19)。埋土から平安時代末以降の時期が推測されるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。
- SK5 下水及び水道管の攪乱により、遺構が分断されているものの、遺構のほぼ全体を検出した。東西 $1.75m$ 、南北 $3m$ 、深さ $0.05m$ の楕円形の土坑である(図19)。埋土から平安時代末以降の時期が推測されるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。
- SK6 SD1の下層、SK7の上層で検出した。最大 $1.36 \times 3.0m$ 、深さ $0.05m$ の不整な楕円形で、南端は調査区外に続く。埋土から平安時代末以降の時期が推測されるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。形状が不整形であることから、自然堆積層の可能性もある。

溝

- SD1 SK7の上層から検出した。調査区を縦断し、南北に続く。最大幅 $7.2m$ 、延長 $11m$ 、深さ $0.1m$ を測る。平安時代末から鎌倉時代頃の須恵器甕などが出土した。
- SD2 SD7の上層から検出した。調査区を縦断し、南北に続く。最大幅 $0.95m$ 、延長 $7.6m$ 、深さ $0.1m$ を測る。北側はSD3と $0.5m$ の間隔で平行して検出し、南端は西に湾曲してSD3と合流している。平安時代末から鎌倉時代頃の須恵器甕などが出土した。
- SD3 SD7の上層から検出した。調査区を縦断し、南北に続く。最大幅 $1.7m$ 、延長 $11m$ 、深さ $0.1m$ を測る。平安時代末から鎌倉時代頃の須恵器甕などが出土した。
- SD4 調査区を縦断し、南北に続く南北方向の溝である。埋没時期の異なる溝が重複している。上層のSD4-1は、幅 $0.5m$ 、深さ $0.2m$ 、延長は $11m$ を検出した。陶器の壺と皿の破片が出土しており、室町時代末頃の時期が当てられる(図23-84,85)。SD4-2は、検出した最大幅 $2.5m$ 、深さ $0.5m$ で、平安時代末から鎌倉時代頃の須恵器甕、白磁碗、瓦質甕などが出土した(図23-76～83)。現況の水路とほぼ同位置で確認したことから、古い水路を踏襲している可能性もある。

掘立柱建物跡・柱穴

- SB1 SP15～22で構成される。東西 $4.3m$ 、南北 $4.6m$ を測る。柱間は2間 \times 2間である。主軸は $N-65^{\circ}-E$ である。柱穴は、 $0.25 \sim 0.3m$ の円形で、柱痕跡は $0.15m$ である。SP15,17,18の埋土から須恵器甕が出土した(図23-67～70)。底部は糸切りで、時期は平安時代末～鎌倉時代頃の時期が推測される。
- SB2 SP27～35で構成される。東西 $4.1m$ 以上、南北 $3.9m$ を測る。柱間は2間 \times 2間である。主軸は $N-65^{\circ}-E$ である。柱穴は、 $0.25m \sim 0.3m$ の円形や楕円形を呈し、柱痕は $0.15m$ である。埋土から平安時代末以降の時期が推測されるが、出土遺物が細片のため詳細は不明である。
- 柱穴 この時期の柱穴は、SB1,2を構成するものを合わせて47基である。いずれも柱穴の掘方が直径 $0.2 \sim 0.35m$ の円形を志向している。柱痕跡が残るものは直径 $10 \sim 15cm$ を測る。SP10からは、須恵器甕が出土している(図23-66)。

第三章 考察

市之郷遺跡で検出された焼土 (S13、S15) の考古地磁気年代

兵庫県立大学大学院
被災復興政策研究科
森永 速男

1. はじめに

土壌に含まれる磁性鉱物(酸化鉄や水酸化鉄)は堆積時の地球磁場情報(強度と方向)を記録する。この磁化(磁場の化石)を堆積残留磁化と呼ぶが、磁気的には不安定な場合が多く、磁場記録としての信頼性は低い。堆積後に、土壌が何らかの過程(例えば、古代人の焚き火など)で熱を受けると、土壌中の磁性鉱物は化学的に変化したり(主に水酸化物から酸化物に)、加えて熱的な残留磁化を獲得する。そういった過程を経て、土壌は堆積時よりもかなり大きい強度でより安定な残留磁化(熱残留磁化)を示すようになる。その残留磁化の方向は、堆積時よりもさらに正確に、被熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壌が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つようになることを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究(考古地磁気学)が行われてきた。その成果として、過去2,000年間の地球磁場方向変化のほぼ連続した考古地磁気標準曲線が作成されている(Hirooka, 1971, 1983; Maenaka, 1990)。この曲線と年代未詳の焼土の残留磁化方向を比較し、一致する箇所をさがすことによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの(土器編年など)であるということ、さらに被熱した焼土が記録した地球磁場記録の時間経過に伴う劣化を考慮しなければならない点、である。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地磁気年代も修正されなければならない。そして、記録された地球磁場情報の劣化を改善する、すなわち劣化の原因となっている、焼土が二次的に獲得した磁化を除去しなければならない。さらに、窠跡などの年代では、使用の最終年代が得られるのであって、操業開始、もしくは最盛期の年代が求まるのではないことを知っておく必要がある。

2. 試料採取と磁化測定

市之郷遺跡で確認された焼土範囲2箇所(S13とS15)からそれぞれ10個の焼土試料を、磁気コンパスを用いて定方位で、約7cm³のポリカーボネイト製の立方体容器を用いて採取した。残留磁化測定にはスピナー磁力計を、二次的な磁化(被熱時の磁場記録の劣化をまたらすノイズ)の除去には交流消磁法を用いた。一般に被熱後に焼土が獲得する二次的な磁化は3mTもしくは6mTの交流消磁で取り除けることが知られているので、3mTの磁場で消磁した後の残留磁化を用いて考古地磁気年代を決定することとした。

3. 磁化測定結果・考察と考古地磁気年代

交流消磁後の各試料の残留磁化強度・方向(偏角と伏角)およびそれらの平均値を表1にまとめた。また、消磁後の残留磁化方向と平均方向を図1に示した。

焼土の交流消磁後の平均残留磁化方向は、S13では平均の偏角 = 22.7°、伏角 = 45.4°、 $k = 88.1$ 、 $\alpha_{95} = 5.2^\circ$ 、S15では平均の偏角 = -9.0°、伏角 = 53.4°、 $k = 146.4$ 、 $\alpha_{95} = 4.3^\circ$ (k は信頼度パラメータで大きいほど、 α_{95} はFisherの95%信頼円で小さいほど、方向データの揃いが良いことを示している)であった。これら2箇所の焼土試料の残留磁化方向はそれぞれ良く揃っており、被熱時の地球磁場の記録としてかなり信頼できる。これらの消磁後の平均方向と、過去2,000年間の標準的な考古地磁気曲線(Hirooka, 1971)との比較を図2に示す。この図で明らかのように、それぞれの焼土範囲の平均方向と標準曲線との対応を捜すと、S13では、明瞭に対応する年代区間はないが、二次的な磁化の除去が不十分だったと考えて、あえて対応をさがすと考古地磁気年代は西暦300年~400年と推定される。また、S15では標準曲線とかなり良く対比でき、考古地磁気年代は西暦700年~800年と推定できる。同じ遺跡内で検出された焼土にもかかわらず幅のある年代推定となったが、すでに述べたように二次的な磁化(被熱時の磁場記録を乱すようなノイズ)を必ずしも上手く取り除けていない可能性もある。しかし、それぞれの焼土範囲内では試料の残留磁化方向は良く揃っているの、異なる時代に被熱したとする立場でこの結果を利用してもしよいのかも知れない。

<引用文献>

- Hirooka, K., 1971. Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan, Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167-207.
Hirooka, K., 1983. Results from Japan, in Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments, eds. Creer, K. M. et al., 150-157, Elsevier, Amsterdam.
Maenaka, K., 1990. Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan, Rock Mag. Paleogeophys., 17, 21-25.

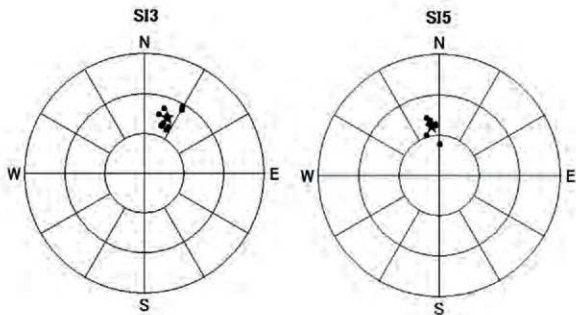
試料	交流消磁レベル	残留磁化強度 (mAmm)	偏角 (°)	伏角 (°)
S13				
I11	3mT	0.0008857	17.0	39.2
I12	3mT	0.0010870	20.6	49.6
I13	3mT	0.0013250	26.4	53.5
I14	3mT	0.0014080	27.0	50.7
I15	3mT	0.0012870	20.0	52.1
I16	3mT	0.0010710	30.2	35.1
I17	3mT	0.0011510	29.5	32.0
I18	3mT	0.0016560	19.4	51.9
I19	3mT	0.0011860	21.5	44.1
I20	3mT	0.0010300	13.3	44.3
平均		0.0012087	22.7	45.4

$$k = 88.1 \quad \alpha 95 = 5.2^\circ$$

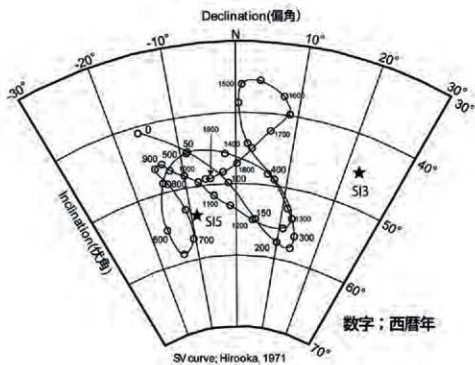
試料	交流消磁レベル	残留磁化強度 (mAmm)	偏角 (°)	伏角 (°)
S15				
I21	3mT	0.0012640	-12.7	46.5
I22	3mT	0.0012670	-9.5	48.3
I23	3mT	0.0014060	-12.1	51.0
I24	3mT	0.0009636	-8.0	52.2
I25	3mT	0.0012050	-9.3	51.5
I27	3mT	0.0007568	0.3	66.5
I28	3mT	0.0006272	-4.5	52.9
I29	3mT	0.0005001	-18.3	58.7
I31	3mT	0.0007856	-4.1	51.9
平均		0.0009750	-9.0	53.4

$$k = 146.4 \quad \alpha 95 = 4.3^\circ$$

挿表1 焼土範囲 (S13及びS15) で採取した土壌試料の残留磁化 (強度・方向) とその平均値調査地遠景



挿図1 焼土(S13及びS15)それぞれで採取した土壌試料の、交流消磁後の残留磁化方向(●)及び平均方向(★)



挿図2 焼土範囲(S13及びS15)の平均方向と考古地磁気の標準曲線との対比

第四章 総括

今回の調査では、古墳時代中期から後期の堅穴建物跡を中心に検出し、調査地の南北で実施された兵庫県教育委員会第1次調査、第4次調査等の成果から推定されていた集落の広がりを追認することができた。特に古墳時代中期を中心とした比較的限られた時期での継続した遺構の分布が把握でき、平成28年度から29年度にかけて北隣で実施した、姫路市第16次調査の成果と合わせて、市之郷遺跡における古墳時代中期の集落域の北限と東限をほぼ確定することができた。これにより、既往調査成果を総合すると、古墳時代中期と後期で集落域の中心範囲が異なっていることも明確となった。

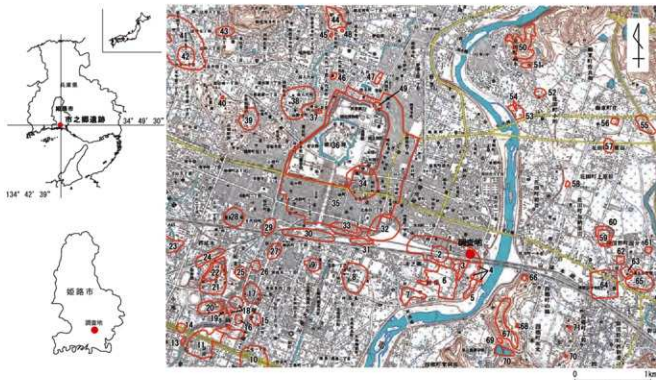
また、調査地内で遺構検出面となっている土層に変化がみられ、東端では砂礫層、SK7以西は、黄灰色砂混じり粘質土であった。この土層には弥生土器が含まれ、SK7の下層で確認した土砂の堆積状況からも、弥生時代中期から後期の間に埋まった旧河道であると推測される。この旧河道の西層は、SD4付近とみられ、南隣で平成29年度に実施した第18次調査でも河道の一部を確認している。これより西でも同様の土層が遺構検出面であるが、北隣で実施した第16次調査では同様の土層から弥生時代中期初頭(Ⅱ期)の遺構を確認していることから、少なくともそれ以前に堆積した土層であると判断している。このように調査地付近は、現況より起伏のある地形であったことが推測できるが、古墳時代中期の堅穴建物跡は、周辺の既往調査でも遺構検出面が砂礫になる比較的標高が高い地点からの検出例は少ない。水田の開墾による削平を受けた可能性も否定できないが、遺構の構築条件の一つである可能性もあり、継続した検討が必要と考える。市之郷遺跡における集落域の推移と渡来系文化の受容と浸透過程を考える上での資料が増加した。

		県1次	県2次	県3次	県4次			県5次		市13次	市14次	市16次
					西	中央	東	西部	北東部			
中期前葉	TG232 }	SH18 SH01 SH08							SH-E02 SH-E07	SH-E12	SI6	SI3 SI8 SI9 SI11
		SH9 SD51 SH14						SH-W01 SH-W02			SK17	
中期中葉	TK73 }	TK216 SH4		SH7 SH18						SH-E16 SH-E09	SI1 SI4 SI5	SI16
		TK208 SB19 SK61 SK68							SH-E01 SH-E26		SK7 SI2 SI3	SI8
中期後葉	TK23 }	TK47 SK67 SD65 SD66 SH5 SK60								SH-E10	SH1	
		TK15 TK10		SH16								SI15 SK17
後期前葉	MT85 }	TK43 SH1 SD6 SH4, 6, 20 SD5 SB5, 7, 11, 13, 31, 34, 42 SD7, 28, 30 SB24, 25, 41		SH24					SH-E24	SD-E26 SH-E08	SD7	SI17
		TK209 SD4 SH23, 17, 21 SB27, 35, 36, 37 SE01 SB09, 10 SD31, 3	SK8 SK11	SH6 SH11	SH17 SH18 SH19 SH14 SH15				SH-E18 SH-E19 SH-E20 SH-E23 SD-E05			SI14
後期末葉	TK217 }	TK217 SB30		SK9 SK11	SH8 SH10 SH7 SH9					SH-E11 SH-E13 SH-E15 SH-E22 SD-E19		SK15

挿表2 市之郷遺跡 古墳時代中期～後期の遺構変遷表

〔引用・参考文献〕※編著者名を付す資料については、50音順に掲載する。

- (1) 今里幾次「播磨市之郷弥生式遺蹟の研究」『古代文化』14-9 1962 日本古代文化学会
(今里幾次 1980『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会に再録)
 - (2) 鎌木義昌「市之郷遺跡発掘調査概報」『姫路市埋蔵文化財調査報告書』1971 姫路市埋蔵文化財調査団
 - (3) 鎌谷木三次「市之郷廢寺」『播磨上代寺院跡の研究』1942 成武堂
 - (4) 古代の土器研究会編『都城の土器Ⅰ 都城の土器集成』1992 古代の土器研究会
 - (5) 笹栗拓「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年—古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質—」
大阪文化財研究第50号』2017 (公財)大阪府文化財センター
 - (6) 多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡第6分冊』1996 兵庫県教育委員会
 - (7) 田辺昭三他『陶邑古窯址群Ⅰ』1966 平安学園考古学クラブ
 - (8) 長友朋子・田中元浩「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』
(大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号) 2007 大手前大学史学研究所
 - (9) 「渡来人の受容と生産組織」『日本考古学協会 2003 年滋賀大会資料』日本考古学協会 2003 年滋賀大会実行委員会
 - (10) 『韓式系土器研究Ⅰ』1987 韓式系土器研究会
 - (11) 『市之郷遺跡Ⅰ』(兵庫県文化財調査報告第286冊) 2005 兵庫県教育委員会
 - (12) 『市之郷遺跡Ⅱ』(兵庫県文化財調査報告第372冊) 2010 兵庫県教育委員会
 - (13) 『市之郷遺跡Ⅲ』(兵庫県文化財調査報告第406冊) 2011 兵庫県教育委員会
 - (14) 『市之郷遺跡Ⅳ』(兵庫県文化財調査報告第433冊) 2012 兵庫県教育委員会
 - (15) 『市之郷遺跡Ⅴ』(兵庫県文化財調査報告第454冊) 2014 兵庫県教育委員会
 - (16) 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』((財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第75輯) 1993
大阪府教育委員会 (財)大阪府埋蔵文化財協会
 - (17) 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』((財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯) 1995
大阪府教育委員会 (財)大阪府埋蔵文化財協会
 - (18) 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』((財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第10集) 1996
大阪府教育委員会 (財)大阪府文化財調査研究センター
 - (19) 『野々井西遺跡・ON231号窯跡』((財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第86輯) 1994
大阪府教育委員会 (財)大阪府埋蔵文化財協会
 - (20) 『菟屋北遺跡Ⅰ』(大阪府埋蔵文化財調査報告 2009-3) 2010 大阪府教育委員会
 - (21) 「(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡(第2次調査)」『TSUBOHORI 平成9年度(1997)』(姫路市埋蔵文化財調査略報)
1999 姫路市教育委員会
 - (22) 「(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡(すこやかセンター建設に伴う)」『TSUBOHORI 平成13年度(2001)』
(姫路市埋蔵文化財調査略報) 2003 姫路市教育委員会
 - (23) 「(仮称)姫路駅周辺第3地点遺跡 キャスティ21住宅建設予定地」『TSUBOHORI 平成12年度(2000)』
(姫路市埋蔵文化財調査略報) 2002 姫路市教育委員会
 - (24) 『姫路市史』第2巻 1970 姫路市役所
 - (25) 『姫路市史』第7巻下(資料編考古) 2010 姫路市役所
 - (26) 『市之郷遺跡第16次発掘調査報告書』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第59集) 2018 姫路市教育委員会
- ※ 土器の器種分類および時期区分については、弥生時代—古墳時代初頭は(8)、古墳時代中期は(5)、(7)、(10)、(16)～(20)、古墳時代後期—奈良時代は(4)に準拠した



- | | | | | | |
|--------------|-----------------------|--------------|--------------------|----------------|-------------|
| 1 市之郷遺跡 | 14 長越遺跡 | 25 横括遺跡 | 38 八代深田遺跡 | 50 石積山城跡 | 63 壇場山古墳 |
| 2 市之郷南寺 | 15 古原敷遺跡 | 26 村原遺跡 | 39 岩崎町遺跡 | 51 石積山1・2号墳 | 64 播磨国分寺跡 |
| 3 阿保横跡 | 16 浜田遺跡 | 27 岩田遺跡 | 40 名古山遺跡 | 52 小川南寺 | 65 国分寺台地遺跡 |
| 4 市之郷長堤遺跡 | 17 黒敷遺跡 | 28 千代田遺跡 | 41 比井遺跡 | 53 長谷遺跡 | 66 八重嶺山横跡 |
| 5 阿保下長・永河原遺跡 | 18 小山遺跡 | 29 南畝町遺跡 | 42 比井南寺 | 54 高木遺跡 | 67 坂元山1～9号墳 |
| 6 阿保遺跡第2地点 | 19 生矢神社裏遺跡 | 30 豆腐町遺跡 | 43 山崎山1～7号墳 | 55 上原田遺跡 | 68 富山古墳 |
| 7 阿保遺跡第1地点 | 20 手納山南丘遺跡 | 31 朝日町遺跡 | 44 八代山古墳群
1～6号墳 | 56 宮ノ浦遺跡 | 69 坂元山南麓遺跡 |
| 8 北条遺跡 | 21 手納山北丘群集墳
1～12号墳 | 32 神屋町遺跡 | 45 大蔵神社前遺跡 | 57 上原田南寺 | 70 坂元山遺跡 |
| 9 豊沢遺跡 | 22 手納山北丘遺跡
1～12号墳 | 33 駒前町遺跡 | 46 御茶屋町遺跡 | 58 小幡方遺跡 | 71 上野山古墳 |
| 10 三宅遺跡 | 23 手納山北丘遺跡 | 34 本町遺跡 | 47 富士才遺跡 | 59 播磨国分尼寺跡 | 72 中鶴山古墳 |
| 11 畑田遺跡 | 24 山崎遺跡 | 35 姫路城下町跡 | 48 東光寺山古墳 | 60 播磨国分尼寺周辺遺跡 | |
| 12 竹の前遺跡 | | 36 特別史跡 姫路城跡 | 49 野里門下層遺跡 | 61 国分寺横跡 | |
| 13 湯田遺跡 | | 37 東山後宮跡 | | 62 山之姥古墳(第3号墳) | |

図1 調査の位置と周辺の遺跡 S=1:50,000

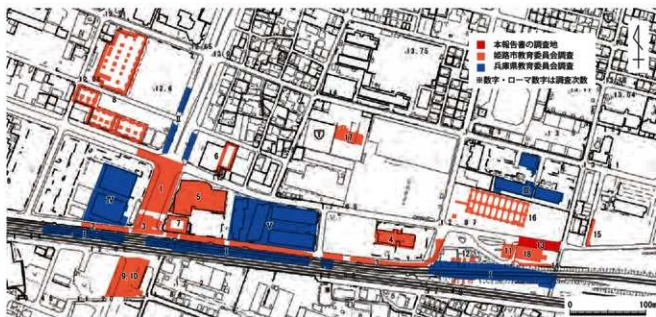


図2 市之郷遺跡の既往調査箇所位置図 S=1:5,000

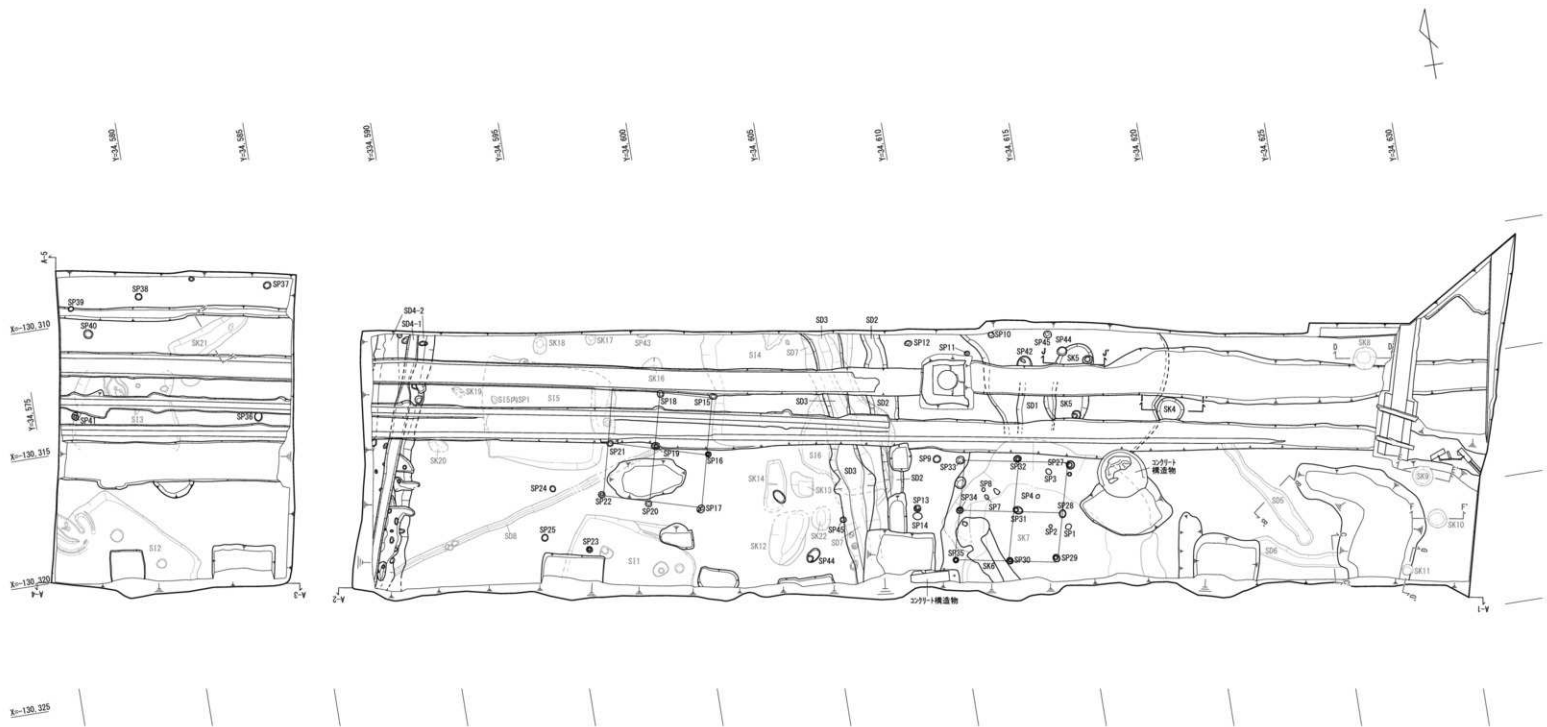


图3 調査区全体图 (上層) S=1 : 150

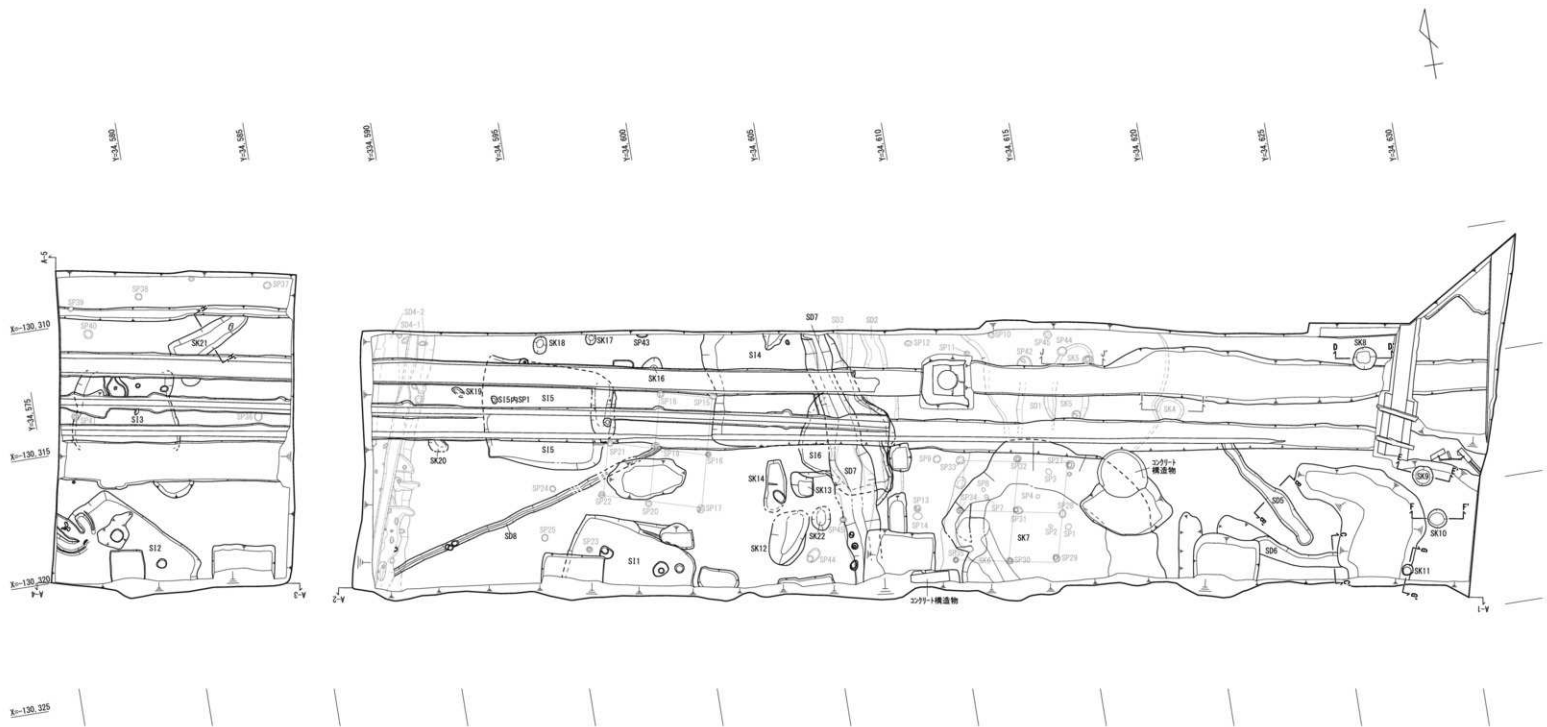


图4 調査区全体图 (下層) S=1 : 150

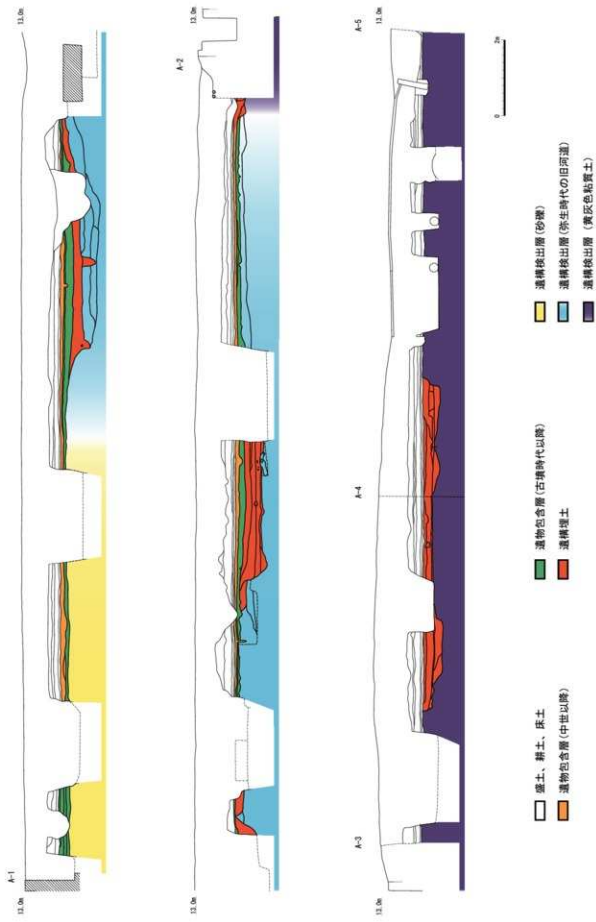
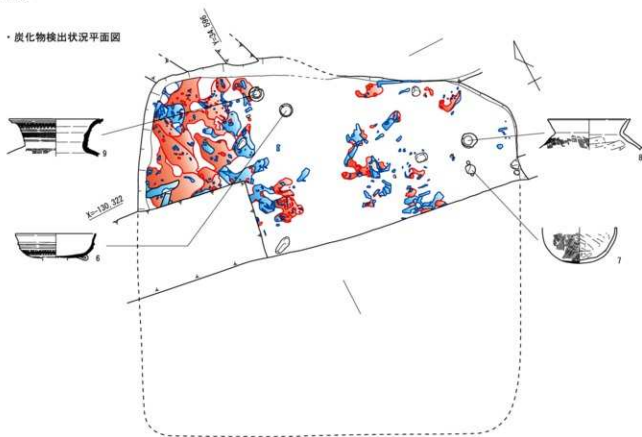


図5 調査区南壁断面図 S=1:100

図版 5

・炭化物検出状況平面図



・床面検出状況平面図

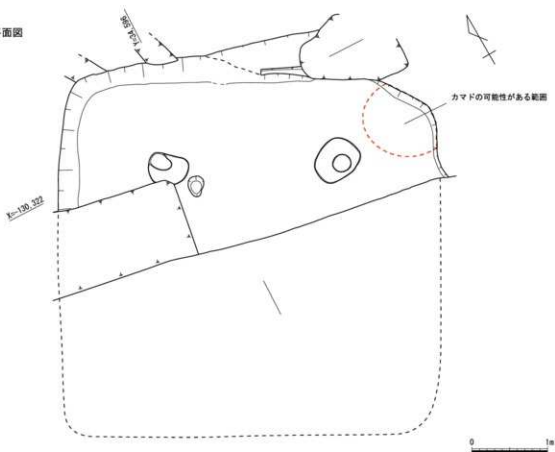
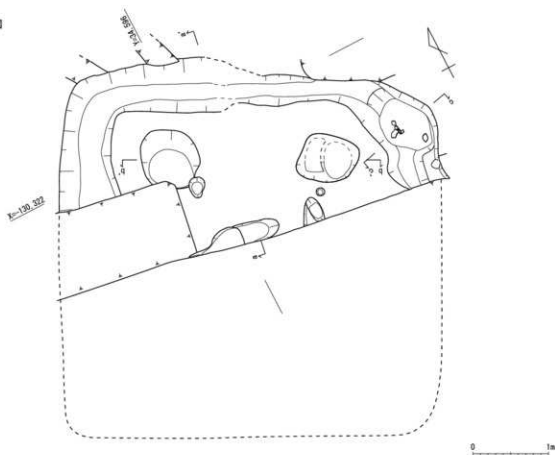


図6 S11詳細図1 S:1:50

・完備状況平面図



・断面図

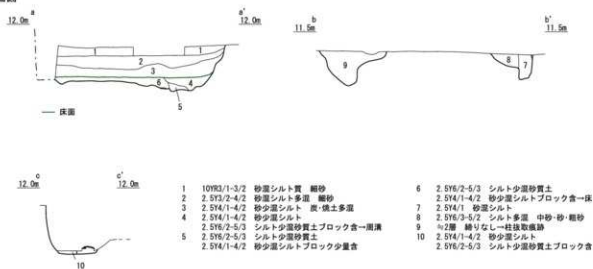
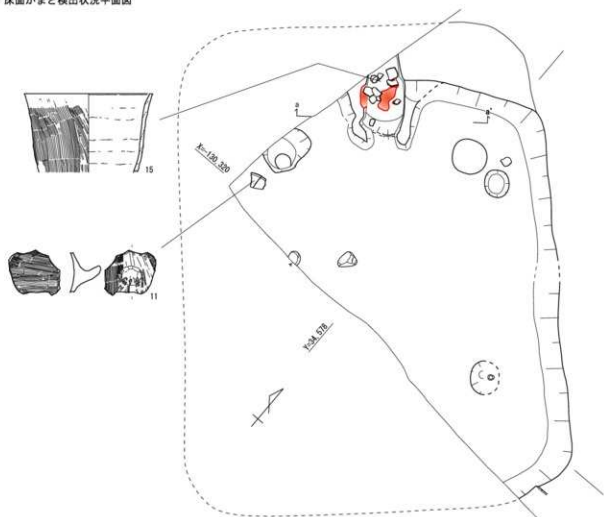
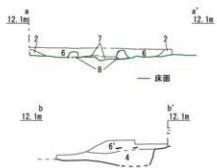


図7 S11詳細図2 S=1:50

・床面かまど検出状況平面図



・かまど断面図



※注記は図9と共通

・かまど周辺 遺物出土状況平面図

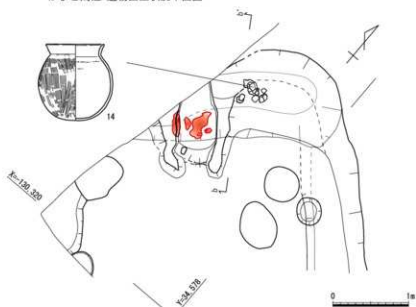


図8 S12詳細図1 S:1 : 50

・床面かまど検出状況平面図

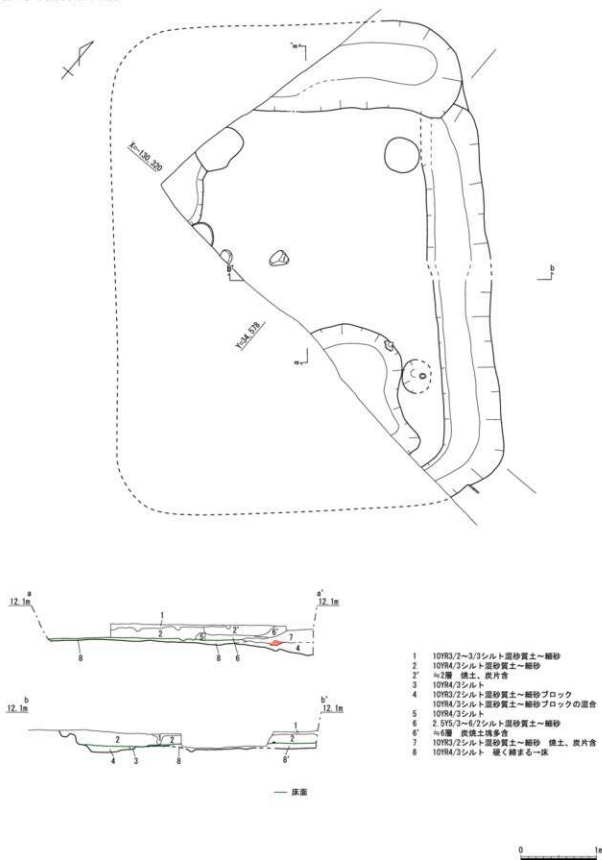
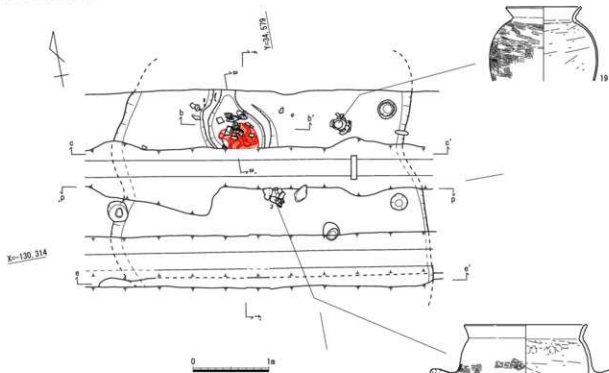
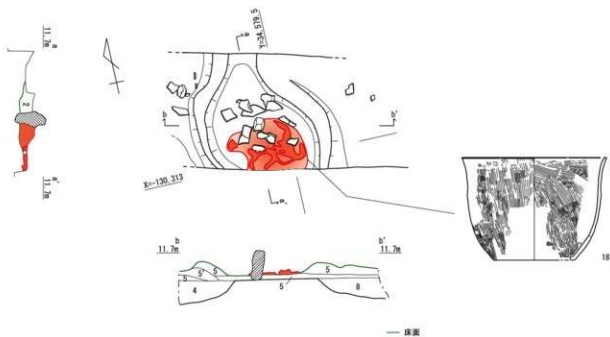


図9 S12詳細図2 S=1:50

・床面検出状況平面図



・かまど詳細図

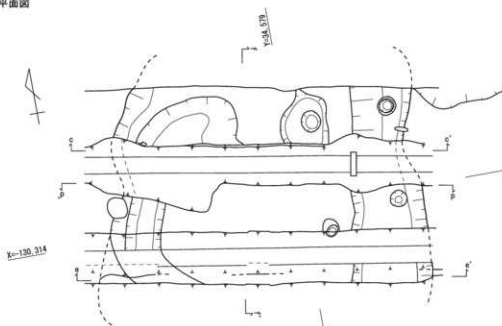


※注記は図11と共通

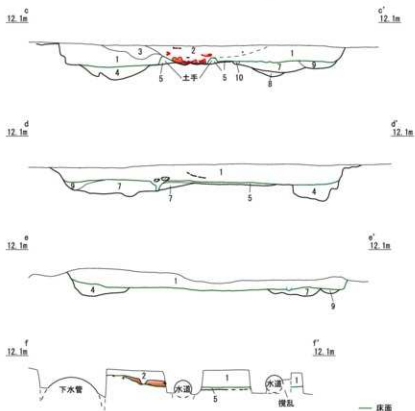
0 50cm

図10 S13詳細図1 S=1:50・1:25

・完備状況平面図



・断面図

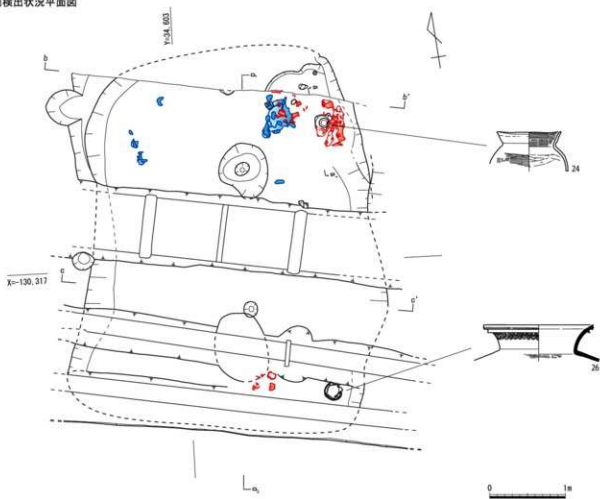


- | | | | |
|----|---------------------------------|----|-----------------------------------|
| 1 | 2.5Y4/1-10YR3/1 シルト質細-中砂 | 6 | 8層ブロック+1層ブロック |
| 2 | 2.5Y3/1-2/1 シルト質細-中砂 焼土・炭多含 | 7 | ≒5層 跡まり弱い |
| 3 | 2.5Y3/1-4/1 シルト質細-中砂 2層より焼土・炭少含 | 8 | 2.5Y5/3 砂混シルト～砂質土 分層はできないが下層ほど砂多い |
| 4 | 10YR4/2-4/3 8層ブロック、シルト混砂質土 | 9 | 2.5Y4/1-4/2 砂多混シルト質土 |
| 5 | 10YR4/2-4/3シルト質細-中砂 硬化一床 | 10 | ≒1層+8層 |
| 5' | 10YR2/3-2/2シルト質細-中砂 | | |

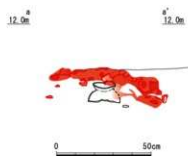
0 1m

図11 S13詳細図2 S=1:50

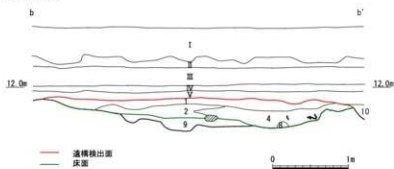
・床面検出状況平面図



・土器No.1出土状況立面図



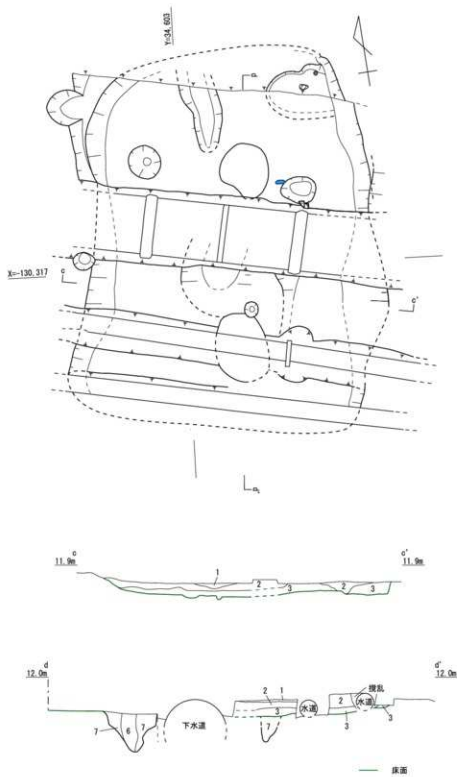
・かまど断面図



- | | | |
|---------------------------|-------------------------------|-------------------------|
| I 凝土 | 1 10YR3/1 砂 粗砂多混シルト | 6 10YR4/1-4/2 シルト混砂質土 |
| II 凝土 | 2 2.5Y3/1-3/2 砂、粗砂混シルト 炭・焼土含 | 7 2.5Y5/3 シルト |
| III 凝土 | 3 2.5Y4/1-4/2 シルト | 8 2.5Y3/1-3/2 炭・焼土含 |
| IV 2.5Y5/2シルト混砂質土層 中世遺構埋土 | 4 10YR3/1-2/1 砂、粗砂混シルト 炭・焼土多含 | 9 2.5Y5/3-5/4 小礫混砂質土 |
| V 10YR3/2粘質土 包骨層 | 5 2.5Y5/2-4/2 シルト混砂質土 硝子層 | 10 10YR3/3 砂混シルト S07-1層 |

図12 S14詳細図1 S=1:20・S=1:50

· 完備状況平面図



※注記は図11と共通

图13 S14詳細図2 S=1:50

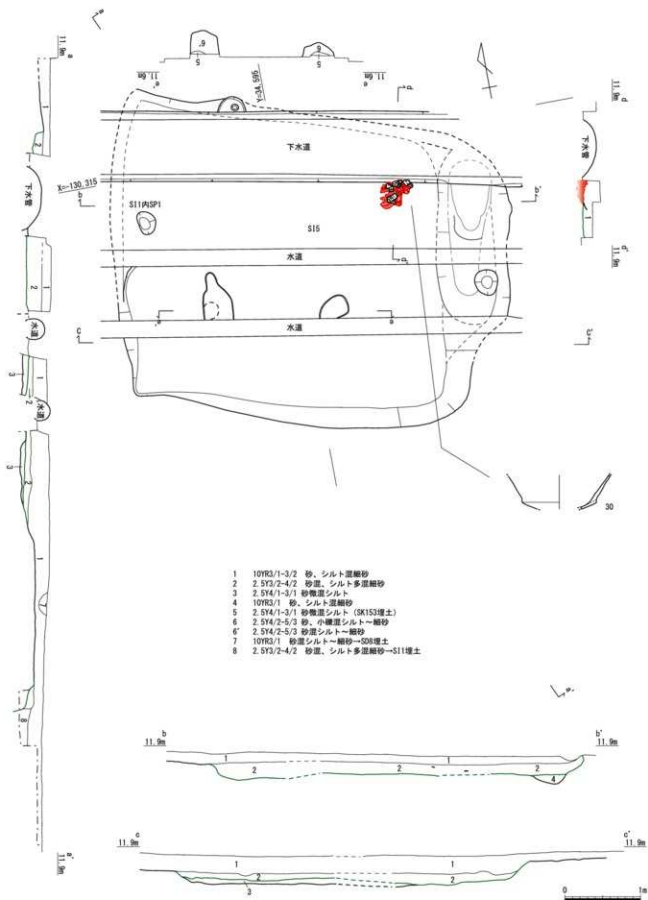


図14 S15詳細図 S=1 : 50

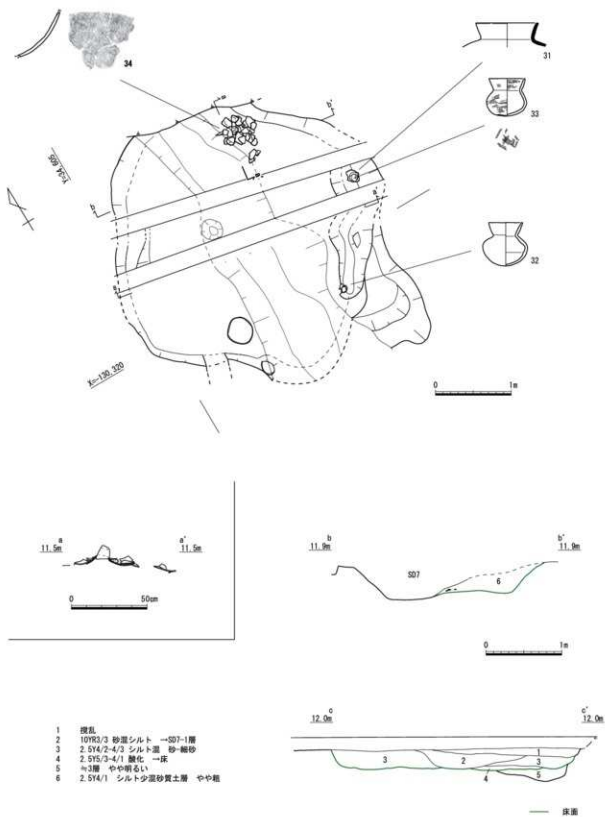


図15 S16詳細図 S=1:50・S=1:25

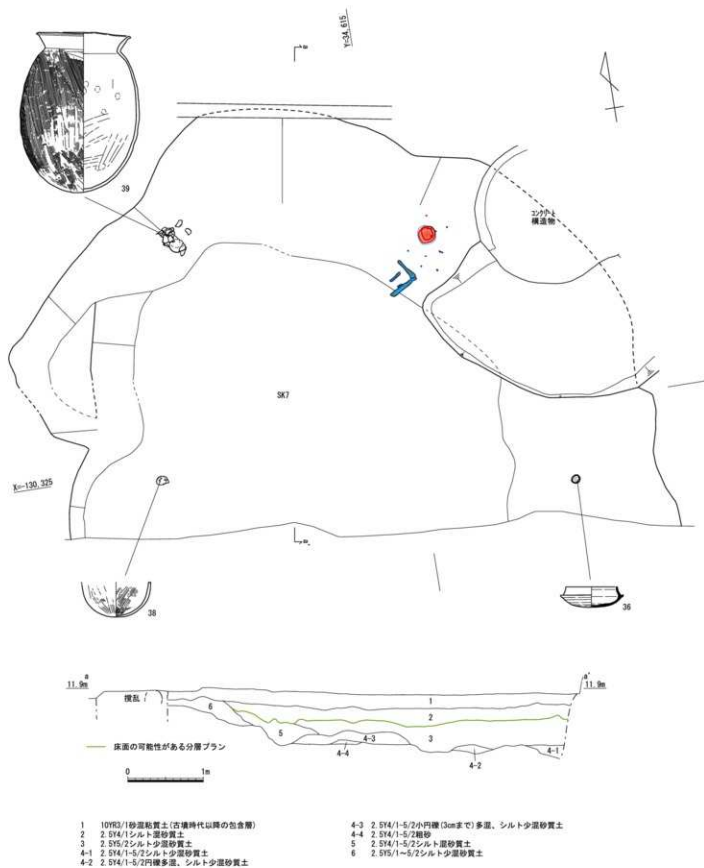


図16 SK7詳細図 S=1 : 50

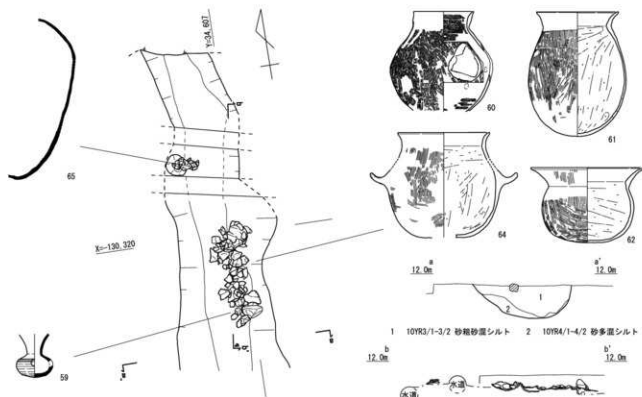


図17 SD7遺物出土状況詳細図 S=1:50

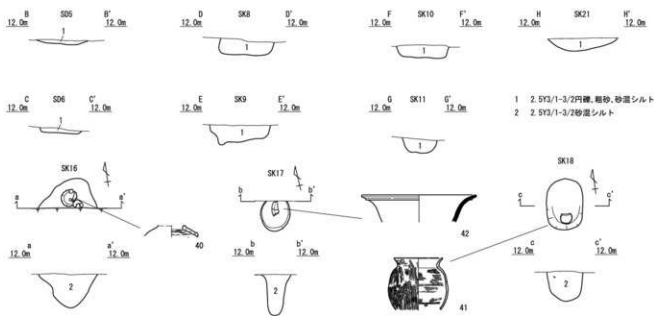


図18 SK断面図及び詳細図(下層) S=1:50 ※SD5~SK11の平面図は、図4に掲載

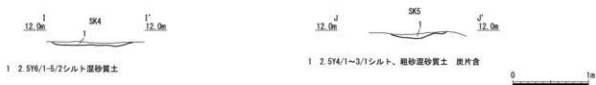


図19 SK断面図(上層) S=1:50 ※平面図は、図3に掲載

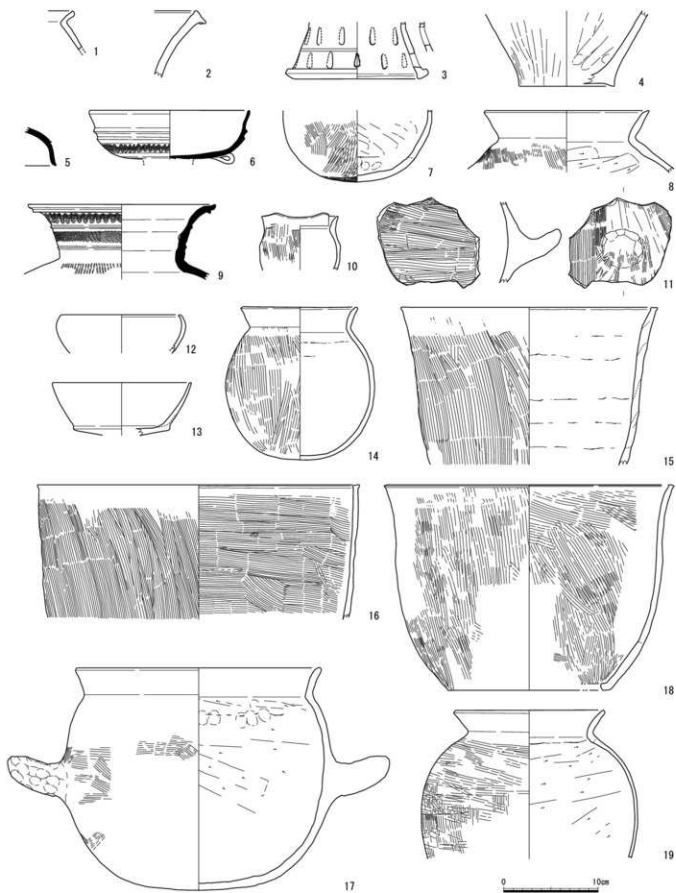


图20 出土遺物実測図1 S=1:4 (1~4 SK7下層 5~9 S11 10~16 S12 17~19 S13)

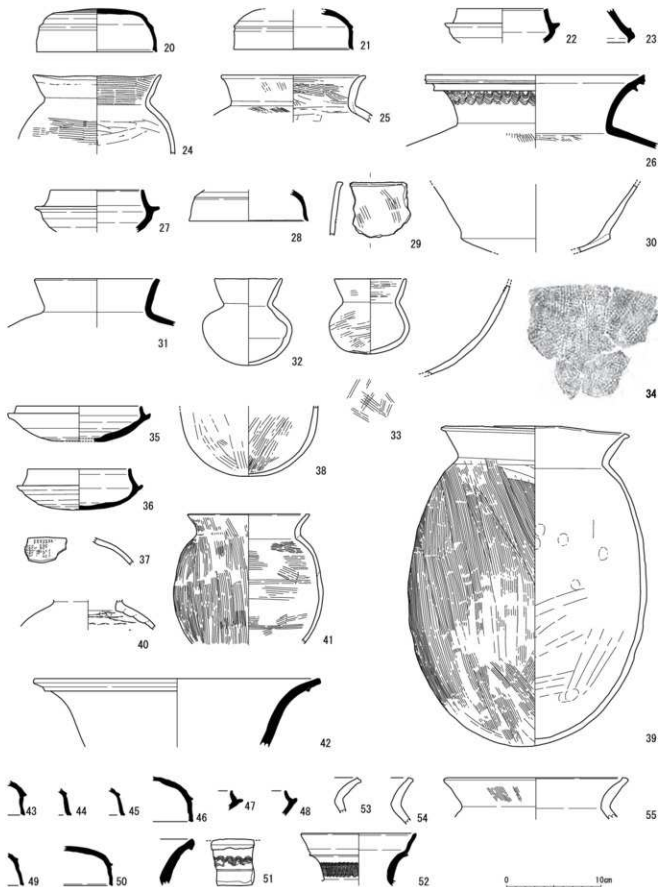


图21 出土遺物実測図2 S=1:4 (20~26 S14 27~30 S15 31~34 S16 35~39 SK7
40 SK16 41 SK17 42 SK18 43~55 SD7)



56



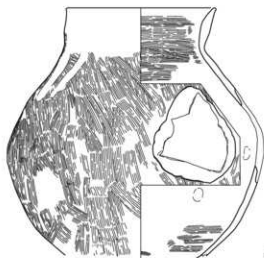
57



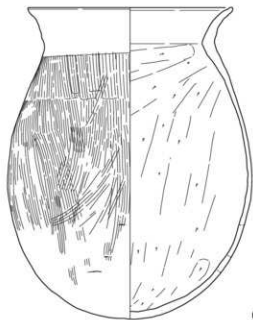
58



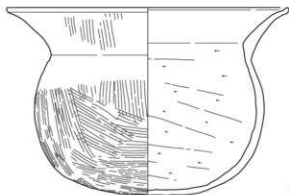
59



60



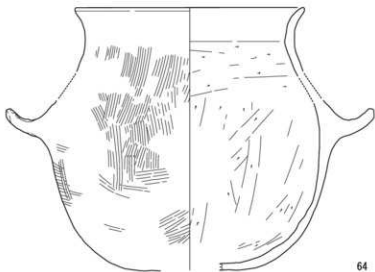
61



62



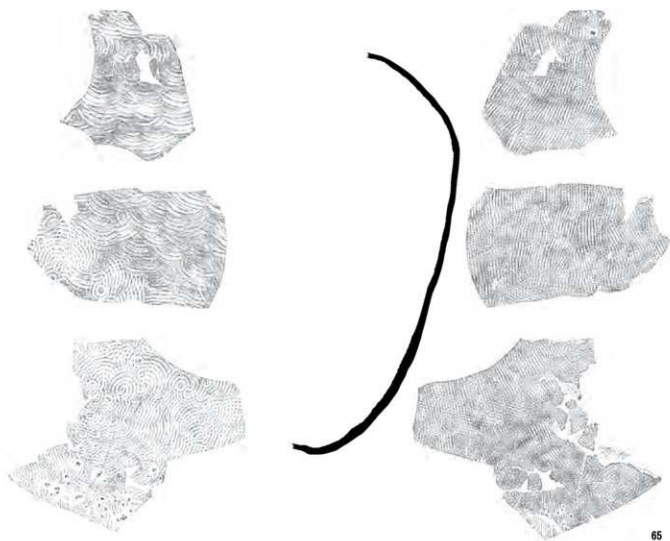
63



64



图22 出土遺物実測図3 S=1:4 (56~64 SD7)



65

上層遺構

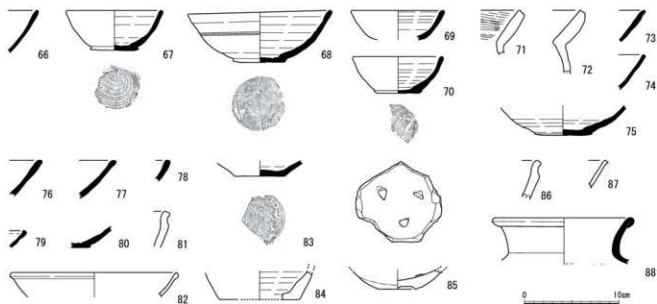


図23 出土遺物実測図4 S=1:4 (65 SD7 66 SP10 67 SP15 68 SP17 69,70 SP18 71~75 SK5 76~83 SD4-2 84,85 SD4-1 86 SD1 87 SD3 88 検出中)

番号	出土遺物	出土位置	品名	口径	底径	高径	最大径	発見状況	用途	色別(外)	色別(内)	出土	埋没状況	調査内	備考
1	SK7	弥生土層 釜	弥生土層 釜	-	14(2)	-	-	口縁部一部破	平蓋	237B/4黄褐色	107B/4C白・黄褐色	φ17-26mmの石蓋・長径17cm・角形底付	高化・埋没のたれ平蓋	高化・埋没のたれ平蓋	
2	SK7	弥生土層 釜	弥生土層 釜	-	16(7)	-	-	口縁部一部破	黒灰	737B/3黄褐色	137B/3黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ 9方角ナナ	口縁部コナナナ コナナナ	
3	SK7	弥生土層 高杯	弥生土層 高杯	-	18(3)	13(3)	13(3)	破損10%	普通	37B/4黄褐色	737B/4黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部ナナ スズムシ	口縁部ナナ スズムシ	
4	SK7	弥生土層 釜	弥生土層 釜	-	18(3)	16(3)	17(2)	破損下方一部破	普通	737B/2灰白色	107B/2灰白色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	高杯 ナナナ ナナナ	9方角のヒコビナ	
5	01	101内901	弥生土層 釜	-	-	-	-	口縁部10%	黒灰	96B/4灰色	96B/4灰色	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
6	01	01-1	弥生土層 高杯	46.0	33.0(3)	-	17.0	破損10% 底面欠損	黒灰	237B/2黄褐色	96B/2灰色	φ140mm下の石蓋・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
7	01	01-4	土師器 釜	-	17(3)	-	-	破損一部破	黒灰	107B/3C白・黄褐色	107B/4黄褐色	φ140mm下の石蓋・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
8	01	01-3	土師器 釜	17.4	16.3	-	12(1)	口縁部一部破	黒灰	107B/4C白・黄褐色	107B/74C白・黄褐色	φ140mm下の石蓋・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
9	01	01-2	弥生土層 釜	19.8	17.8	-	13(1)	口縁部一部破	黒灰	96B/4灰色	96B/4灰色	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
10	02	1	土師器 小壺	18.1	18.1	-	18.1	口縁部一部破	普通	107B/2灰白色	107B/2灰白色	φ17-15mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
11	02	3	土師器 手形鉢	-	-	-	-	底面手形跡のみ	普通	107B/2C白・黄褐色	107B/73C白・黄褐色	φ17-15mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
12	02	2	土師器 鉢	12.1	14.2(1)	-	13.1(1)	口縁部一部破	普通	107B/2C白・黄褐色	107B/73C白・黄褐色	φ17-15mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
13	02	5	土師器 高杯	14.3(1)	13.6	-	14.7	底面2%	黒灰	737B/3灰色	737B/3灰色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
14	02	6	土師器 釜	12.4	16.1	-	15.8	口縁部一部破	普通	107B/4黄褐色	37B/2	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
15	02	7	土師器 釜	18.8(1)	18.4	-	12(1)	口縁部一部破	普通	107B/2灰白色	107B/3黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
16	02	8	土師器 釜	18.6(1)	18.2(1)	-	13.4	口縁部一部破	普通	107B/2C白・黄褐色	737B/74C白・黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
17	03	01-2	土師器 手形鉢	19.7	23.4	-	16(1)	口縁部一部破	黒灰	107B/3C白・黄褐色	37B/2灰色	φ17-26mmの長石付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
18	03	力27内	土師器 釜	29.4	21.7	17(2)	26.6	口縁部一部破	黒灰	37B/4灰色	37B/4灰色	φ140mmの長石・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
19	03	01-1	土師器 釜	19.6(1)	19.6	-	22.0	口縁部一部破	黒灰	107B/4C白・黄褐色	107B/73C白・黄褐色	φ140mmの長石・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
20	04	上層	弥生土層 釜	12.0	14.0(1)	-	12.6	底面10% 破損10%	黒灰	107B/2C白・黄褐色	107B/73C白・黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
21	04	上層	弥生土層 釜	12.0	14.2	-	11.8	口縁部一部破	黒灰	96B/4灰色	237B/2暗赤褐色	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
22	04	上層	弥生土層 鉢	18.4	18.2	-	13.2	口縁部一部破	黒灰	96B/4灰色	96B/4灰色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
23	04	上層	弥生土層 高杯	-	13.5(1)	-	-	破損10%	黒灰	96B/4灰色	737B/3灰白色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
24	04	01-1	土師器 釜	13.0	18.4	-	11.8	口縁部一部破	普通	37B/2灰色	37B/2灰色	φ140mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
25	04	遺下層	土師器 釜	15.1	17.0	-	18.7	口縁部一部破	黒灰	37B/4黄褐色	37B/4黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
26	04	01-3	弥生土層 鉢	22.0	17.5	-	25.0	口縁部一部破	普通	37B/4白色	37B/4白色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
27	05	01	弥生土層 鉢	18.0	14.5(1)	-	13.2	1%	不蓋	977/1灰白色	977/1灰白色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
28	05	01	弥生土層 鉢	19.0	20.2	-	19.0	1%	黒灰	107B/2灰白色	107B/1-1/1-1灰色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
29	05	01	土師器 釜	-	13.4	-	-	口縁部2%	不蓋	107B/3黄褐色	107B/3黄褐色	φ21-46mmの石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
30	05	01-1	土師器 高杯	-	17.2(1)	-	12.1	底面2%	不蓋	737B/3-4-4黄褐色	737B/3-4-4黄褐色	φ21-46mmの石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
31	05	01-3	弥生土層 鉢	13.2	15.1	-	14.6	口縁部一部破	黒灰	237B/1黄褐色	737B/3黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
32	05	01-1	土師器 小壺丸蓋	17.2	8.9	-	18.4	口縁部一部破	普通	107B/2C白・黄褐色	107B/73C白・黄褐色	φ140mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
33	05	01-2	土師器 小壺丸蓋	17.2	17.8	-	18.4	口縁部一部破	普通	107B/2C白・黄褐色	107B/73C白・黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
34	05	01-4	弥生土層 釜	-	18.3	-	-	破損 底面・底面	不蓋	107B/2C白・黄褐色	107B/4黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
35	05	01-2	弥生土層 鉢	13.1	13.7	-	13.6	口縁部一部破	黒灰	97B/2灰白色	97B/2灰白色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
36	05	01-1	弥生土層 鉢	16.2	4.2	-	13.2	100%	黒灰	37B/4黄褐色	37B/4黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
37	05	01-3	弥生土層 鉢	-	12.8(1)	-	-	破損 底面・底面	不蓋	107B/4黄褐色	107B/74C白・黄褐色	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
38	05	01-2	土師器 釜	-	17.4	-	14.3	破損下方一部破	不蓋	107B/4C白・黄褐色	107B/73C白・黄褐色	φ140mmの長石・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
39	05	01-3	土師器 釜	19.2	12.0	-	25.4	口縁部一部破	普通	107B/2C白・黄褐色	107B/3C白・黄褐色	φ140mmの長石・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
40	SK7	01-1	土師器 釜	-	20.1	-	14.2	口縁部一部破	普通	737B/4灰色	37B/2	φ20mm下の石蓋・長径17cm・角形底付	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
41	SK7	01-1	土師器 釜	12.0	18.7	-	11.8	口縁部一部破	普通	237B/2黄褐色	737B/2灰色	φ140mmの長石・高径17cm	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	
42	SK7	01-1	弥生土層 鉢	18.0	17.2	-	13.0	口縁部一部破	普通	96B/4灰色	96B/4灰色	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	口縁部コナナナ	

表1 出土遺物観察表1



写真1 調査地遠景(北から)



写真2 調査地遠景(南東から)



写真3 調査区と建造中のJR東姫路駅(東から)



写真4 調査区全景(真上から)



写真5 調査区全景(西から)



写真6 S11 炭化材検出状況(南から)



写真7 S11 床面検出状況(南から)



写真8 SI1 完掘状況(南から)



写真9 SI1断面(北から)



写真10 SI1 土器No.1、2出土状況(東から)



写真11 SI1 土器No.3出土状況(西から)



写真12 S12 床面検出状況(南東から)



写真13 S12 かまど(南東から)



写真14 S12 かまど周辺遺物出土状況(北から)



写真15 S12 周溝検出状況(南東から)



写真16 S12 完掘状況(南東から)



写真17 S13(西から)



写真18 S13 完掘状況(西から)



写真19 S13かまど 遺物出土状況(南から)



写真20 S13かまど 完掘状況(南西から)



写真21 S13かまど サンプル採取状況(北西から)



写真22 S14(西から)



写真23 S14かまど周辺 土器No.1出土状況(西から)



写真24 S14 土器No.2出土状況(東から)



写真25 S14かまど周辺 床面検出状況(西から)



写真26 S14かまど 完掘状況(北東から)

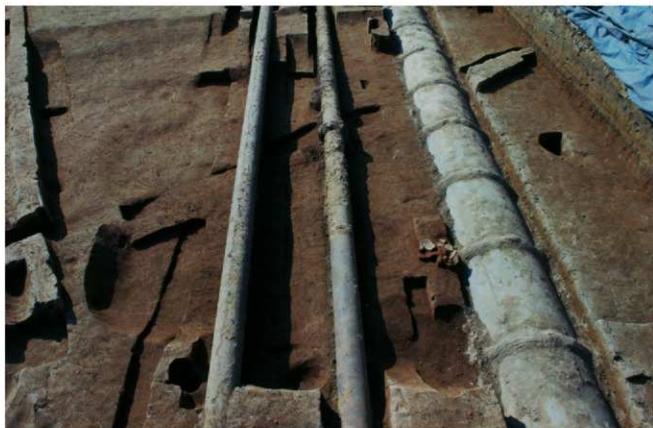


写真27 S15(東から)



写真28 S15かまど 土器No.1出土状況(東から)



写真29 S15 完掘状況(西から)



写真30 S15 サンプル採取状況(北から)



写真31 S15 サンプル採取状況(南から)



写真32 S16(北東から)



写真33 S16かまど 検出状況(北から)



写真34 S16かまど 遺物出土状況(北から)



写真35 S16 土器No.1出土状況(東から)



写真36 S16 土器No.2出土状況(東から)



写真37 SK7(南西から)



写真38 SK7 断面(西から)



写真39 SK7 土器No.1出土状況(西から)



写真40 SK7土器No.2出土状況(北から)



写真41 SK4(南から)



写真42 SK5(南から)



写真43 SK8(南から)



写真44 SK9(南から)



写真45 SK10(南から)



写真46 SK11(西から)



写真47 SK17 土器No.1出土状況(東から)



写真48 SK18 土器No.1出土状況(南から)



写真49 SD7(南から)



写真50 SD7土器 No.1~6出土状況(北から)



写真51 SD7 土器No.6出土状況(西から)



写真52 SD7 土器No.7出土状況(北から)



写真53 SD7 断面(北から)



写真54 SD4(南から)



写真55 SD5(北から)



写真56 SD6(西から)



写真57 SD8(南西から)



写真58 SB1(南から)



写真59 SB2(南から)



写真60 出土遺物1 ※数字は実測図番号に準ずる



写真61 出土遺物2 ※数字は実測図番号に準ずる



39



36



42



59



61



60



62



64

写真62 出土遺物3 ※数字は実測図番号に準ずる

報告書抄録

ふりがな	いちのごういせきだい13じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	市之郷遺跡第13次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第73集							
編著者名	小柴治子							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	平成31年(2019年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちのごういせき 市之郷遺跡	ひょうごけんひめじ 兵庫県姫路市 ひめじしやうさちょうめ 日出町三丁目	28201	020462	34° 49′ 28″	134° 42′ 49″	2015.7.28 ～ 2015.11.16	593㎡	道路 整備
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号		
集落跡	弥生時代	河道		弥生土器		20150237		
	古墳時代	竪穴建物跡、土坑、溝		須恵器、土師器				
	奈良時代	溝		須恵器、土師器				
	平安時代～室町時代	掘立柱建物跡、溝、土坑		須恵器、土師器、陶磁器				
要約	古墳時代から中世の遺構を検出し、調査地の南北で実施された、既往調査成果で想定されていたこの時期の集落の広がりを確認することができた。特に古墳時代中期の比較的限られた時期での継続した遺構の分布が把握でき、市之郷遺跡における集落域の推移と、渡来系文化の受容・浸透過程を考える上での資料が増加した。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第73集

市之郷遺跡第13次発掘調査報告書

平成31年(2019年)3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地
TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 内海印刷株式会社
〒670-0808 兵庫県姫路市白国5-8-4

